大正元年八月二十日發行

婦人衛生雜誌

第二百七十三號

婦人衛生雜誌

第二百七十三號目次

講演

叢談

育兒

家庭衛生

質疑

雜報

廣告

謹ミ畏ミテ
大行天皇ノ御登遐ヲ
哀悼シ奉ル

講演

歌聲に就て

醫學士　千葉眞一

唯今から歌の聲に就て御話を致さうと思ひます、吾吾の聲には二色あるので、話の時の聲とそれから歌を謳ふ時の聲とがあります、併ながらもと話の聲と歌の聲とは極く親密な關係があるので、決して全然別物ではないのであります。たとへば吾々が話をして見ましても其話の調子を少しのばしまして、それに一寸節をつけると直に歌のやうな聲になる、之をもう少し巧くやると即ち歌の聲となるのであります、斯くの如く話の聲と、歌の聲とは互に密接な關係がありまするが、然しそれは或る一つの國に於て適用する事であります、例へば日本人の話の聲は彼の日本固有の歌の聲とは極て密接なる關係があるけれども、國語を全然異にする外國の例へば佛蘭西人の話の聲と日本の歌の聲とは全く別であります、即ち佛蘭西人の話の聲は佛蘭西の歌の聲とは親類筋でありますけれども、日本の歌の聲とは異つて居ります。

近頃我國では日本固有の歌と尚其外に外國から輸入された所謂聲樂と云ふ名の下に行はれて居りまする歌との二種がございます、聲樂が外國から輸入されまして以來其聲の出し方も大分外國の方法が取つてある。聲樂の聲は日本の長唄、常磐津などの聲とは一寸聞いても大變違ふのでありますから、若し長唄、常磐津を聲樂の聲で行らせると全く其音樂の特秱の點を失つて仕舞ひまして、節は合うか知れませぬけれども、如何にも面白くないものになるのでありま

す、それと同じく常磐津、清元の聲で佛蘭西の歌を謳ひましては是又甚だおかしなものとなる。彼樣な次第でありますから、聲の衛生とか又は聲を如何にして出したら宜いかと云ふ樣なことに付きまして、本來二色にお話しないと解らないのでありまするが、時間がありませぬ爲に今日は極く大體について要點丈けを一寸御話しやうと思ひます、御承知の通り聲の出る所は即ち俗に喉笛と申しまする所で、此處にかたい軟骨がある其形がむかし西洋の武人が持つた楯に似て居る所から獨逸國では、即ち楯狀軟骨と申して居ります、我國では之を甲狀軟骨と申して居ります、此軟骨の中に極めて巧妙な仕懸がありまして、即ち二枚の極微妙な運動をする所の聲帶と云ふものがありまして、それが狹くなり廣くなつて聲帶の緊張の度を變じ從て振動の模樣をかへましていろ〳〵な音を出します、つまり一つの笛であります

(圖を示す)

此處に聲帶と稱へるものが左右兩側にありまして、前の方は二枚の聲帶が一ヶ所に付て後の方は別々に分れてついて居るこの後の方は離れたり近づいたりする運動が巧妙に出來るやうになつて居りまして、例へば高い聲を出さうとする時には是が少し側に寄りまして早く振動する、低い聲を出す時には振動が遲い又聲を出さんで息だけして居る時には邪魔だからして少し遠くに離れて居ると云ふ仕掛になつて居ります、聲を出す時に必要な空氣は即ち肺臟から來るので、詰り皆さん御承知の笛のついた護謨風船と同樣な仕組になつて居るのでありまして彼の護謨風船の內の空氣が笛について居るゴム條に振動を與へて音が出るのと同じく肺臟から出る空氣が聲帶に振動を與へて其處で初めて音聲を發するのであります、聲を發する機械としては是だけでありまするが併しながら其外に聲を出す際に甚だ樞要な關係を持てをる機關が澤山ある、即ち口腔、鼻腔、其他歯牙なども皆關係がございますし、舌なども亦關係があります、それ等が相寄つていろ〳〵な聲を發する

のであります。
先きに外國の歌の聲と日本の歌の聲と大分違ふと云ふ事を申上げましたが、此咽喉の聲の出る機械の構造は決して西洋人と日本人と違つて居る譯のものではないが、其聲を出す方法は大に異なるのであります。一二の例を擧げまするご外國では聲を出す際に種々要領があります、例へば低い聲を出す時には鼻根部から聲を出すやうにしますとか、或は師匠によりましては自分の首が無い積りでうたへなどと云ふやうな事もあり。又高い聲を出しまするときは後頭部から聲を出せと云ふやうな事を要領として教へて居ります。

其他聲を出す時の姿勢或は呼吸法等をも敎えて居ります其等の關係は日本人が日本の歌を謳ふ時の模樣とは大分違つて居ります、槪して申しまするご、日本人が日本固有の歌卽ち長唄などをうたひます時、殊に浪花節などをうたう際には聲帶の振動ばかりでなく、其附近の粘膜又は筋肉に力を入れてさうして一種の極く强い聲を出します俗に力ある聲と云ふのはそれであります是が音樂上果して良い聲であるかどうかは知りませぬが、兎に角日本の歌ふ聲はさう云ふ風に出すのであります、外國の發聲要領とくらべて大分異なつて居ります、彼樣な譯でありますからして、喉頭の病氣、其他聲の教育等も外國と日本とで異つて居ります、醫者の立場から申上まするご何うも外國の行り方の方が衞生上又理屈上良さゝうに思はれます、元來聲の敎育法としては、兒童が小學校に入つて直ぐ其敎授に取掛らなければならぬのであります、外國では唱歌の時間にも兒童に決して無理な聲を出させない、一體人間の咽喉の力には或る限りがある、又人々に依つて高い調子の出る人もありそれまで屆かぬ人もある、それ等を一緒の同じ高さの調子で謳はせる事が場合によつて有害な事がある要するに無理に聲を出すと云ふことは喉の衞生として甚だ宜しくない、或る國に於きましては其聲の出る調子に由りまして、高い調子の者と低い調子

の者とを區別して教えて居る位であります、こう云ふ次第でありまして將來良い聲の出る樣にするには幼時より注意して無理に聲を出さぬ樣に注意するのが必用であります。それから兒童の年齡が段々進みまして十四五歳になると、殊に男子には著しく聲變りがする、女子でも矢張り俗に言ふ聲變りと云ふ事があります、此際には喉の機械が頓に發達を致しますので、從つて今までの聲と調子が變つて來る、此時期には容易に病氣に罹る怖れがありまして、咽喉を檢査しますと充血をして居る、從つて一寸した僅かな刺戟があつても病氣に罹ると云ふ時期でありますから、斯う云ふ際には決して聲を無理に使てはいけませぬ、衛生上最もよろしいのは斯う云ふ際には歌を謳はぬ樣にして喉頭を安靜にして置く事が宜からうと思ひます。それから段々其時期も過ぎますると、今度は婦人方には月經の時期が來る、此月經の際には矢張り聲を出す機械の抵抗が甚だ弱なつて居りまして、僅かな歌を歌つても聲帶の中に出血して聲が忽ち止まるやうなことがあるのでありますからこう云ふ時期には歌を謳はぬやうになすつたら宜からうと思ひます、外國では殊に芝居などの女優が此時機になりますと、如何なる約束があつても、如何なる事情があつても必ず芝居を休んで仕舞ひます、又公衆にはそれに對して何等不服を言ふことが出來ぬやうになつて居ります、それ位でありますから、この事は誰しも注意しなければならぬので、さう云ふ時には聲帶を休養させ安靜にして置くことが必要であります、其外聲帶にいろ〳〵な病氣がありまして、腫物が聲帶に出來る場合とか或は聲帶が腫上ることがある、是等は平素の攝生によりて豫防する必要があります且つさう云ふ際には成るべく早く治療を受けた方が宜いのである、喉に就ての病氣は其外申せば澤山ありまするが、先づ其位にして置きまして、其外の聲を出すに極て必要な舌或は鼻腔などに於きまして、鼻腔が腫れて詰りまするど聲の響が惡くなる、所謂鼻詰り聲になつて仕舞ひます、外

國では死聲即ち響のなき聲と申して居りますが、斯ふ云ふ際には矢張り鼻の方を癒して行かなければならぬ、從つて平素から歌の聲を良くすると云ふには鼻の方をも注意して、鼻の故障を去ることが必要である、それから舌にも（圖を示す）舌の根本にいろいろな變化が起る事がありまして其爲めに聲が出なくなる事がある、其他扁桃腺なども關係がありまする。其外に又精神上の狀態で以つて聲が出なくなる事がありまして、是は外國の例でありまするが、或有名な歌ひ手が芝居の演藝中歌つて居りましたが、忽ち途中で聲が止つて何うしても次が出來なかつたそれから皆驚いて其處に居つた專門家が咽喉を檢査して見たけれども一向充血もして居らぬし、又聲帶內の出血とも思はれず、病氣と云ふ事は認められなかつた、それから能く調べて見ると、其歌手が舞臺へ出る少し前に自分の家が或る事情の爲めに急に執達吏が來て、悉皆家財を押收する事になつた報知を受取つた事が分りまして、即ちこの精神上の打擊が原因であつたのでありまする。斯の如く精神上の事も矢張り其歌ふ聲に關係を及ぼすものでありまして、其外ヒステリーとか或は神經衰弱も亦大に關係があります、殊にヒステリーで聲の出なくなる事は屢々あるのであります。さう云ふ際に喉を檢査しても一向何處も病氣と思ふやうな所が無い、さう云ふのに幾ら咽喉に藥を付けても吸入をやつても決して癒るものでないので、矢張りヒステリーを癒さなければいけぬのであります。其外聲を出すのに極く大切なのは肺臟並に心臟でありまして、前に御話しました通り、肺臟から空氣が出でゝ聲が出るのであるから其本の肺臟が惡くなつてはよい聲の出る譯はありませぬ。それであるから肺臟を平素から強くして置くと云ふ事は、聲を出す爲め、又聲をよくする爲めに必要な事であります。其他心臟が薄弱では決して十分に發聲が出來ないのであります。

さう云ふやうないろ／＼な喉の機械並に精神其他內臟の病氣は非常に歌の聲に關係があると云ふ事はこ

れで大抵御分りであらうと思ひます。處が吾々專門醫が屡々別段病氣のない方から何うしたならば良い聲が出るだらうか又はどうしたら聲が切れない樣になるだらうとか、或は又平素の持藥に何を用ゐたら良からうかと云ふやうな事を度々問はれる事があります。

で病氣の際には無論是は醫者の治療に依つて癒すより仕方がありませぬが、平素の注意として亦種々なる事がありますが、其內持藥として何を用ゐたら宜からうかと云ふことになると隨分日本にも此目的の藥はあるので、又外國などでもいろ／＼な事を行つて居ります。詰り平素からして聲の痛まぬやうに聲の續くやうな物を始終飮んで居つたら宜からうと云ふ考で、日本の音樂專門家の中にはいろ／＼な物を用ゐて居る、例へば玉子などを飮んだり、或はさらし飴などをしやぶるとか、其外生薑の搾汁をお湯に入れて飮むとか或は又黑豆の煮汁を飮む、甚だしきは蚯蚓を吞むと云ふやうな事をやりますが、實際是等のものが、慥に效能があるか何うかと申しまするに蚯蚓の如きはしかとは申されませぬが、以上のものは要するに喉の發聲機關に分泌を盛んにし尙又唾液の分泌を盛んにさして、それに依つて咽喉が乾かぬやうにする作用がありますのでこれは決して惡い事でないのであります。却つて水で含嗽をするとか、或は硼酸で含嗽をするよりは餘程效力がある、水は直ぐに蒸發して仕舞ひまして却つて後になると乾いた感じを起すものでありますが、唾液はそれほど蒸發致しませんで、自然に咽喉を濕すのでありましてこれは聲の爲には甚だ宜いのである、從つて甘草劑なとを口に啣えて居るのも宜しいので、藥屋には「つぼうさう」とか其外色々の名をつけた甘草劑があります。斯う云ふ物を口に入れて分泌を盛にして咽喉を自然に濕して置けば、聲が途中で切れると云ふやうなことも幾らか豫防出來ようかと思ひます、外國でも同じやうに歌ふ前に生玉子を飮みましたり、或は黃色なぶつ切飴のやうな形をした甘草劑を口に入

れると云ふやうなことをして居ります。要するに美聲を出さうとするには極く若い時分からの聲の教育が大切でありまして、其教育が上手く行屆き、且つ咽喉の機械のいろ／＼な場所に一寸とも病氣が無く肋膜其他心臓、精神等兎に角身體を強くすると云ふことが最も重要なことでありまして、それには適度の運動もしなければならぬし、且又平素感冒に罹らぬやうに、埃の多い所を避けるやうにし、その上で適當の發聲法の下に始て鶯のやうな美聲が出るのであります、アルベルトと云ふ人が美聲は健康なる身體に宿ると申しましたが誠に尤もな言であると思ひます。

さ月こは啼もふりなん杜宇
またしきほどの聲を聞はや

讀人不知

叢談

朝の逍遥

健康を保つ上に於て運動の必要であると云ふことは、今日では誰も承知して居る、殊に近來は種々の體操お遊戯が盛になつて來たことは誠に悦ぶべきことが、漕艇、野球、テニス、其他女學校邊で行はるる遊戯、何れも至極結構である。

然し體操とか遊戯とか云ふものは、誰でも、何れの場合にも行ひ得るものではない、老人には出來ない遊戯もあり、婦人には不適當な體操もあり、又其人人に依て、行つて害になる遊戯も澤山ある。然るに近頃は、身體の爲めの運動と云へば必ず遊戯とか、體操とか云ふことに限られて居るやうに思はれて、

昔よりも反つて運動の範圍が狹くなつて來たやうである。婦人には、水道の便が出來て、一寸栓を捻れば危險の少ない水を思ふがまゝに得られるやうになつたが、井戸の水汲と云ふ優雅な運動は無なつてしまふ。味噌磨とか、雑巾掛などゝ云ふ適當な實用體操は、全く女中衆專門の體操になつて來るが、西洋器械風の味噌磨道具が流行すれば、此すら廢れてしまふことゝ思ふ。これは先づ廢れても他にそれだけ便宜を得、利益があれば止むを得ぬことであるが、茲に一つ廢れて來て遺憾に思ふことは散歩である。十年程前までは、我邦の人々も餘程散歩と云ふことを好きになつて來たやうに見えたが、近頃は餘り悦ばれなくなつたかと思はれる。これは何うも西洋でも、さう云ふ傾があると云ふことである。以前は、夕方になると、夫婦連、子供連、種々の階級の人が幾組も／＼散歩に出たものであるが、近頃では、土曜の晩とか、日曜日の朝でもなければ、わざ／＼散歩などに出掛ける人は甚だ稀になつて來たと云ふことである。これはつまり洋の東西を問はず、生活が苦しくなつて來て、なか／＼散歩の沙汰ではなくなつて來た結果であらうと思ふ。

果してさうとすれば、散歩の出來ないのも無理はない、實に止むを得ぬことゝ思ふが、然し散歩の出來ない事はない、なる程、仕事に追はれて午後や夕方には出來なくなつても朝に出來る筈である。

元來は午後や夕方の散歩よりも朝の散歩の方が遙に健康の爲になる、朝の散歩こそ眞に有益なる散歩である、終日働いて疲勞して歸宅すれば、先づ誰しも服を脱いでくつろぐのが當然である、而して直ぐ入浴して夕飯にするか或は夕飯を濟して入浴すると云ふやうな有樣であるから、普通夕食前の散歩は六ケ敷い、土曜日とか日曜日とかでなければ出來ない、強ひて出掛けるとすれば何うしても夜になつてしまふ、然るに夜の散歩は、種々の方面から見て餘り益がない、寧ろ害の方が多い。之に反して朝の散歩は何れの點から考へても、最も適當で且最も有益であ

る。朝はとても忙しいから散歩などをする時間が無いと云ふ人もあるが、これは朝寢坊であるから忙しいのである、早くさへ起れば、裕に散歩をする時間がある筈である、第一此點から云ふても、努めて朝早く散歩すると云ふことは善い事である、單に朝起るだけでも三文の徳があると云ふのに、今迄出來なかつた散歩が出來、而かも恐らく從來散歩などをしなかつた時よりも時間の餘裕を見ることになるであらうと思ふ、況や早朝散歩の功の偉大なることは、到底技巧的、人工的、規則的の體操法や遊戯などに見ることの出來ないものがあるのである。一體朝早く起きられぬと云ふのは、夜遲く迄寢ずに居ると云ふことの反證である、夜二時間早く寢て、その二時間を朝に讓れば、決して起られぬと云ふ譯はない筈である、凡て從來の慣習を改めるは難いものであるけれども、夜二時間早く寢に就くと云ふことは左程困難な事とは云へぬ、普通朝寢坊を矯正することの困難なるが如く云はるゝのは、其の夜遲く寢ると云ふ原因を顧みずに、唯朝早く起きやうと云ふのであるから無理である、夜さへ早く寢るならば、自然朝はそれだけ早く眼が醒めなければならぬ道理である、別に矯正と云ふ程の事ではない、寧ろ必然的に早く眼が覺るのである。

朝起の效能は昔から唱へられて居る通り澤山あるが、こゝには朝の散歩の衞生上の效能を述べて、益々朝起の功徳を稱揚したいと思ふ。

先づ第一に朝の散歩には障碍がない、今まで八時に起きる習慣であつた人が五時に起ることゝなれば、其間の三時間は眠て居た時間であるから、毎日これを散歩に用ひることが出來る、毎日規則正しく散歩をすることが出來ると云ふのは、非常に價値のあることであつて、餘程の事を犧牲にしても宜しい位のものであるが、恐らく宵張の朝寢坊よりも、早寢の早起の方が毎日散歩をしてもまだ餘裕がありさうに思はれる。夕食前後の散歩となると、兎角途中で知

人に逢ふたり、一寸訪問をしたり、料理屋に寄つたりするやうな機會が多いけれども、朝飯前なれば斯う云ふことは甚稀である。次に何より第一の效能は新鮮なる、塵埃の少ない空氣を呼吸すると云ふ點にある。室内の空氣と屋外の空氣とでは、炭酸量でも塵埃の量でも著しい差があることは誰も知て居る所であるが、特に早朝の空氣は最も清潔である、東京の如き市街でも、朝早ければ頗る清潔である。これ迄朝寢坊の人が、一朝努めて早く起きて上野公園なり芝公園なりに散歩を試みるならば、これが東京かと怪しまるゝ程清潔と閑靜と爽快さを味ふであらうと思ふ、恐らく特別に避暑などを企つる必要を感じなくなるであらうと思はれる。尚は早朝は雨の降ることも稀なものである、大抵塵埃が起り雲が出てから雨が降るものであるから、夕方の散歩よりも雨に妨げらるゝことも比較的少ないのである。

散歩には、體操や遊戯の如き規則も法則も不要である。全く適意の姿勢で、ぶらり／＼と氣の向く方に逍遙すればそれで宜しいのである。新鮮の空氣の中を逍遙すれば、自ら深呼吸をするやうになるものである、何々式の呼吸法なぞと云ふ六ケ敷いことは不必要である。露を帶びた綠の草木は、盛に酸素を吐くのみならず、眼の爲にもこよなき養生となる。

花の香も朝が最も高い、これ鼻の爲となる、嗅神經を刺戟して深呼吸を助けることになり、心氣を爽快ならしむるものである。小禽の歌も朝が最も活潑である、これ亦耳の爲である。此等は單に詩や歌の材料たるのみならず、博物學者の證明して居る事實であつて、小禽なども午後になれば疲勞して、夕方に薄暗くなつて來れば、恐と不安の爲に心臟の動悸が劇しくなり、愉快に歌も謡へなくなるものである。獨り小禽には限らぬ、萬物皆疲勞の色合を呈して來る、然るに朝は之と反對に萬物悉く精氣に滿ち、朝日の光を浴びて益々生々の元氣を發揚する時刻である、此時に方て此中を逍遙する人間の生體も亦、自ら生理、衛生上最良の狀況の中に在るべき

ことは、殆ど證明を待たざることである、實際農家の主人、又これよりも早く外に出掛ける所の獵師、漁夫等に尋ねて見ても、朝の一二時間が最も爽快であると云ふ。何よりも證據、散歩より歸つて朝飯を食べるならば、從來は腹が張つて居て少しも食慾がないのに無理に食べて居つたものが、非常においしく食べられる、殊に味噌汁の如き味の濃きものは食べられず、珈琲を飲むだり、苦い茶を飯にかけたりして、やうやく嚥込むで居た人も、胃袋が變つたかと思ふ程、食慾が良くなるであらう、既にこれだけでも、朝時散歩の效能が明かである。尚ほ歸つた後二十度か二十五度位の水浴を行ふならば、益々宜しい。

斯の如く何れの點より觀察するも、朝の逍遙は非常に有益である。蓋しこれは何人も反對する人はあるまいと思ふが、大抵の人は只朝寢坊の爲にこの大利を失ふのである、若し努めて一週間もこれを實行したならば、恐らく止めることが出來なくなるであらうと思ふ。今頃より始めて十一月までは持續することが出來る、果してこれを能くしたならば、その效果の顯著なることは、自ら證明することが出來るであらうと思ふ。遊戯、體操も結構であるが、廣く何人も實行することが出來て、少しも害が無く、益のみある此の散歩と云ふことを益々奬勵したいものである。一方には生活法の關係より散歩する機會を失ひ、一方には運動法が偏頗に傾く嫌ある今日、敢て朝の逍遙を勸める所以である。

蜜蜂

醫學士 藥學士　高橋學而

第一章　蜜

蜂蜜は醫藥にも備へ、料理にも使ひ、又菓子などにも案梅する醍醐味の一つである。其分析上の成分を申すと

葡萄糖　三六・二〇%

果糖	三七・一一％
蔗糖	二・六三％
糊精	二・八九％
蟻酸	〇・一一％
含窒素物	一・〇八％
其餘の有機物質	〇・五八％
水分	一八・九六％
灰分	〇・四四％

此内初めの三つは、何れも所謂砂糖類の中に屬し、殆ど同程度の甘味と、滋養とを具備した者であるから、從つて蜜蜂を極上等の調味料として、上述の種々の目的に用ゐる事が出來る。其外又之から「メート」といふ一種の酒をも醸もす。此酒などが最古くから、卽殆ど太古時代から、人類に知られた酒精飲料の一である。舊約全書には、乳と蜜との流れ出る郷土の事を記し、又バプテズマのヨハネは野蜜と蝗斯とを常食にしたとかき載せてある。

蜂蜜は御承知の通り、一種の小さい蜂——所謂蜜蜂が之を醸もし成す者で、春は彌生の野に山に、千草八千草の花咲く頃となれば、振々たる小翼は、三々伍々、色に迷ひ香にあくがれて、永き終日を遊び暮らす。

遊ぶと云ふのは横著な人間の考である。迷ふと云ふのは執著の強い人の子の心である。花間に飛びあるく蜜蜂は、極めて眞面目な、又極めて切ない職務を持つ。彼等は花の蕊の根方にある蜜槽から、天生の靈液を吸ひ出して、之を口に含んで我家に歸る。歸り著けば豫め構へられた蜂窩の一つ一つに、其口中の蜜を吐いて、吐き終れば再び之をあさりに行く。斯の如くにして、日には何十回となく、三春の間には幾千度幾萬度ともなく、蕋から巣へ、巣から蕋へと行き交ふて、そうして軈て秋去り冬來る頃の貯を作る。花の蜜槽に在る間は主に蔗糖（普通の砂糖）であつた者が、蜂の口中に含まれる暇に、其唾液の爲めに分解せられて、果糖と葡萄糖とに變したのであ

る。

精製した蜂蜜は、淡黄色の粘稠い液であつて、芳香と甘美の味とを備へ、水には溶け易く、水の一倍半ほどの比重を持つ。原の花の種類に因つて、其香味が多少づゝ違ふのは當然の話である。

第二章　蠟

蜜を貯へるには是非共適當な容器を設けねばならぬ。此目的に恢はせたのが、即ち蜂窩である。蜂窩は無慮數百千の小房から組立てられて、其個々の形は凡そ小さい水晶と類ひし、隣り合せの房々は、互に頗る薄い高壁でしきられて居る。幾百の小水晶を横に、薪を積む様につみ重ねて、其二た列びを一連として連々相竝んで約二尺立方程の蜂窩を成す。かくて千數の小房が笠にて横にも奥行きにも秩序整然と配列せられて、併も其各々へ自在に出這入り、蜜を貯へ得る様に、極めて合理的に、極めて微妙に出來上つて居る有様は、到底自ら目睹した者で、且立體幾何學、建築學の二端に造詣した者でなければ、充分の悟了は出來ぬと云ふ。正面から見れば小さい正六角形が、亀甲模様の様に密接して、之に折々蜜蜂が出入りする所が見える。房の中には蜜を貯へる外に、又幼兒をも安置し、倘自分達も夜間か冬期を此中で暮らす。

此巣の材料が所謂蜜蠟である。蜜蠟も矢張り蜂は自ら之を作らなければならぬ。ダルキン先生の「種の起原」には、「蜜蜂は蜜を餌食として、之を體内の生理的作用で蠟に變じて分泌する。此働をする間は、其蜂は毫も蜜の採集に出かけない。實驗的に之に砂糖を與へて見たら、凡そ其十三分について約一分の蠟を分泌した。斯様な次第故に蜜蜂は極めて蜜蠟を大切にして、其結果として上述の様な、極めて合理的な、極めて經濟な建築法を自得したのであらう。多數の數學者の說に因ると、一定量の蠟を用ゐて、最多量の蜜を貯へ得る容器の形は、やがて蜜蜂がその本能に從つて、構成した者と一致する」と書いてある。細かに蜂窩の傍に這ひ廻る蜂を見ると、其腹

部の節の間から、少しづゝ結晶性の蠟の薄片を分泌して、之を自ら或は他の蜂が吻で拾つて、次第に新しい窩房を形成して行く樣が見られる。

蜂が分泌した時には極めて清淨な、殆ど雪の樣に白い物質であるが、之を更に人間が採取すれば、どうしても多少の不純分が混じて來て、其爲にいくらか帶黄色を呈する。之が所謂黄蠟である。黄蠟を度々沸湯で洗い、又長く日光に曝すと、追々奇麗になつて所謂白蠟となる。白蠟は分泌したての蠟と殆ど違はない。

蜜蠟は化學上の成分から申すと、鯨蠟、脂肪類、油類、樹蠟などゝ極めて緣の近い物質であつて、其にエステル類と云ふ一族の中に列すべき者である。

白色乃至帶黄白色、半透明、微弱の香氣と佳味とを呈する固體であつて、水の上に浮かび、體溫に依つて既に軟くなり、攝氏六十四度位で融解する。其破折面は結晶性の組織を見せる。

用途の主な者には、蠟燭の原料、硬膏軟膏の材料、鑄物刻物の型、蠟紙の製造等で數えられる。

第三章　家畜

蜜蜂は本來野生の動物であつて、家畜と稱へらるべきものではない——

現在の家畜も、其昔しは總て野生の動物であつた。創世の古へカインが弟のアベルを殺して、大神の憤怒を身に受けた時、草も木も彼を呪つて、天地間の萬物は總て彼に顔をそむけたそうだ。此時にも唯犬計りは、罪の子のそばを離れずに、彼を慕ひ、彼をなぐさめ、彼の泪をなめたと云ふ。

併も近世の學説に據ると、犬とても大昔は、矢張り野生動物の、狼の類であつたと申す。此大昔の動物の内で、人類に飼育せられて、次第に溫順な、人なづこい風氣を遵養した者が犬であつて、野生のまゝに世々を經たのが即今の狼となつた。

鷄も亦元は同樣の次第である。現に暹羅國の山野には野生の鷄、——詳しく申せば、家禽の鷄と祖先を同ふする者で、野生ながらに現今まで、幾世の代

代を重ねて來た鳥類があるそうだ。
因に識す。軍鷄はしやむ國より舶來した鷄、矮鷄は同國の隣國、占城國から渡つて來た鷄である。又日本の禽類中では、雉、山鳥が鷄と一番血緣が近い。
同じ暹羅の國には、蠶にも矢張り現在野飼ひのまゝで、立派に繭を作る種類があるとの事である。
家畜の多くは、數百千年の間、人類に養はれ、使はれ、又保護を受けて育つたが爲めに、現在では迚も再び野生の境涯に復り得ぬ者である。假令何等かの故で野生とならうとしても、生存競爭の劇しい自然へ出ては、今まで保護に慣れた動物等は、ぢきに劣敗者となつて絕滅して仕まふ。例へば犬は兎や狐を捕へて餌とする事が狼程上手では無からうし、鷄は山鳥に比べて、狐狸の襲擊を避ける手段を持つまいし、家蠶は小鳥の好餌にせられても之を免れる方便と本能とを忘れて仕舞つたであらう。
家畜の中でも馴養せられた時代が比較的短いか、或は四周の事情が自然界の夫れに比して大差がなかつたか、或は該動物が元來極めて適應性に富む者か、乃至は其他種々雜多な理由で、突然再び野生の域に戾つても、繁榮し得る種屬もある。主家を逃げ出した番の馬が、二三百？年の間に非常に繁殖して、古來かつて馬の居なかつた南米の曠野を、今では殆ど全く獨占し、又飼主の手を免れた若干の家兎から、全濠洲に渉つて繁榮する、野兎の群を生じたのは有名な話である。猫の如きもどうも未だに山野の情を脫却し兼ねる。猫と虎とは學術上同一の祖先から出たと見做さるゝ。
又極めて野性を脫し若い者、若くは飼養の年月が極めて短かい者では、人家に養へば家畜となり、再び野に於てばさながらの野生動物である者もある。例へば印度の象、我國の兎、及びこゝに申す蜜蜂などが此部類に隸屬する。
獨り動物界に家畜がある許りでなく、植物界にも亦全く同じ樣な事實がある。例へば米麥、豆、馬鈴薯

の如きは、今となつては決して野生の狀態に復り得ぬ者、若し戻らうとすれば忽ち生存競爭にまけて仕まふ者、みつば、せり、椎茸或は、柿、栗、桑などの或種類は、人類に培養せられても、又野生のまゝで隨分榮え得る者である。

第四章　蜜蜂の飼養法

前申す通り蜜蜂は、まだ野生の境涯をば、殆ど全く脫却して居らぬ。だから——既に人家に飼養して、之から蕃殖した群もあるが——また自ら山野に巢ふて居る群もある。若し山野、林間、大木の空洞、灌木叢の陰など、要するに見出しにくい所）乃至は廢屋の軒などに、野生の蜜蜂の巢を發見したならば、之を移して我家に飼育するのは、比較的容易な事柄に屬する。勿論その餌食とする花の蜜が入用だから、花咲く野邊のない所、都市の中央、深山幽谷の針葉樹林のなかなどでは、育ふ事も難いし、又自ら巢ふて居る群もない。(但し一里二里位迄は隨分蜜の採取に通ふそうだ）兎に角、野生の蜜蜂の巢を發見したならば、先づ方一尺位、高さ二尺程の木の箱を拵へて、その前後兩面はぬきさしの出來る戶を設けて、そして其戶板には蜜蜂の出這入りに適した小孔を(巾約三分、長さ約四五寸)數多く穿つた者に、內部には酒をかけて、例の巢の側に吊して置く。そうすると凡そ二三日の中に、蜂は全部箱の中へ屋越をして、新に此處に巢を構へ、此中で蜜を釀もして、又仔を孳育する。

やがて窩房が殆ど箱に充滿する程出來て、其冬には蜜が貯へられたと見る時は、一方の戶に眞暗に目張りを施す。光明を求めてなかの蜂が、一兩日のうちに殘らず他の戶の方へ移つた頃、目張りをした戶をあけて、其所の方の巢を全體の半分乃至三分の二程切つて取る。之からあけ出した蜜か又は之に微溫を施して、蠟を融かして分取した蜜は、最上等の佳品になる。之が初めに申上た淡黃色の、日本藥局法に採用せられた蜂蜜である。

次に殘りの蜜蠟を壓搾し、又は遠心力器を用ゐて、

其中に包まれた者を採取すれば、黄色乃至褐色の中或は下等の蜂蜜が出來る。最後に殘る蠟を精製して、淡黄色までにしたのが即黄蠟であつて、更に之を日光に晒して清淨化した者が白蠟である。

蜜蜂は又毎日せつせと働いて、間もなく再びもと程の巣を作りあげる。凡そ三ケ月か半年位に一度づゝ、上の様に巣を切り取つても良いが、餘り取りすぎると蜂が轉居して仕舞ふそうである。

世界の殆どあらゆる邦土、例へば歐洲では獨逸、墺利亞匈牙利、佛蘭西、露西亞、西班牙、以多利亞、東洋では波斯、土耳古、印度、支那などで盛んに蜜蜂を飼養する。我國では九州、四國、紀州、石州などが主な蠟と蜜との產地である。

こゝにごく簡單にのべた飼養法は、我國在來の舊弊なやり方で、其上少々は筆者の覺え違ひもあるかも知れません。進歩した飼養法と、蜜蜂の採集法とは、農學博士玉利喜造氏著の、養蜂改良說といふ本に詳しく出て居るそうです。尙小生の見聞した限り、現今行はれて居る方法に就て、折を見て申上げても宜しいです。

其外蜜蜂の生活狀態、其家族的並びに社會的制度、分業の様子、蕃殖の様、巣の構造の詳細などは、何れも極めて興味のある、又極めて教訓に富んだ事柄ですから、會員の方々と編輯の人の御希望に由つて好機に又御紹介致してもようございます。

蜜蜂並びに蜜蠟は、何れも比較的高價の物品だから、市場は、混成品、若しくは贋造品と云ふべき者許りであつて、純品は殆ど之を得る事が出來ない。

色覺異常と職業の選擇

誰が見ても分かる程の著しい不具者或は白痴なれば、之に不適當な職業を授ける人もなし又自ら選みも致しますまい、跛者は車夫にならず、白痴は博士

にならうとは致しますまい。所が身體竝に精神上の素因、例へば肺結核とか精神病などに特に罹り易い素質がある、卽ち下地を持て居る人がありますが、是になりますと兎角氣がつかない、それで斯樣な人で極めて不適當な職業に就て知らんで居る人も尠くない、此等は、素因の無い人に比して職業病に罹るゝことの多いのは勿論のことであります。

職業を選むに就て最も困難なのは五官器に故障のある人でありまして、一方の耳が聽えないとか、一眼が視えないとか云ふ人は、傍の人から之を認められないことが屢々ある、又輕度なれば兩側に故障がありても氣付かぬことがあります。例へば遠視眼の如きは職業を選む際には全く意とせられぬことが多いのであります。殊に人の氣の付かぬのは、吾々が色神異常と云ふて居ります所の一種の五官器の缺損でありまして、これは、實際生活に於て、その周圍の人々も氣が付かず、當人自身も大抵知らんで居るものであります。それで此は職業を選むに方では一層重大な意味を持て來るものであります。

色盲と云ふ病名は近頃では殆ど何人も知つて居ることであるが、併し色盲とは如何なる障碍があるものかと云ふことになりますと、醫者以外の人は、敎育ある人々でも一寸分からぬのであります。通常色盲と云ふのは、赤色或は綠色に對して盲であつて、その一つ或は二つの色が視えないのであると申します。斯樣に色に對して盲であると云へば、自然の景色或は繪畫などに於て、その紅燃ゆる花、翠滴る梢、此等の物は何も視えないのであらうか、卽ち視渡す所に於て方々に左樣な缺目や穴があるのでありませうか。又色盲者は、總の他の色は能く區別するけれども赤と綠とが同じに視えるのであると云ふ人が往々あります。併しこれは何れも間違いで、所謂色盲と云ひますのは、色に對して盲な譯でもなく、又赤と綠だけを取違へるのでもありません、寧ろ非常に澤山の色を取違へる――尤も其中には赤と綠とありますが、普通の人の視分が附く種々の色を

互に視違へるのであります。スペクトルも紅も同じく七つの主なる色の有ることは誰も知て居る所である、卽ち赤、橙、黄、綠、靑、藍、紫で、學問上では之をその波長に依て區別致しまして、大約七六〇乃至六五〇μμの波長を持て居る色を赤と云ひ、大約五三〇μμの波長のものを綠、大約四八〇μμ波長のものを靑と云ひ、吾々が見ることの出來るスペクトルの境は紫で約四〇〇μμであります。而して其の間の波長のものはそれ〴〵其間にある色に相當して居ります。

(μμはミクロン、卽ち一ミリメートル(約三厘三毛)の十分の一の記號である、μμは又その千分の一で、光の波長は極めて小さいものであるから、斯樣な單位を用うるのである)

普通の人は、光の六五〇μμの赤色と、六四七μμ波長の橙色とを區別することが出來、黄色と綠との間に於ては尙は一層細かな區別をすることが出來、同じ黄色の色合の中に於てさへ一乃至二μμ位の差を區別することが出來る、所が色盲になりますと、一番外の赤色(約七六〇μμ)から帶靑綠色(約五〇〇μμ)までの間に於て一つも此等の色合を視分けることが出來ないのであります。それで普通の人には、總て此等の光は各々階級を異にした種々の明るさの種々の色に見えますけれども色盲者は只各部分に於て明るさの度に相異ある一つ色の帶として見えるのでありまして、此の色帶は、色盲には黄色がかつた赤味を帶びた色合に見えるのであります。併し靑の方に寄れば、これは矢張靑味を帶びて見えます。それから普通の人であれば、紫と靑とは明かに區別されますが、色盲者に取つては、紫は只黑ずむだ靑色にしか見えません。斯う云ふ譯でありますから色盲者になりますと、澤山色のあるスペクトルに於きましても唯二色しか見えません、卽ち第一の部分(約七六〇乃至五〇〇μμ)は、溫味を帶びて居る色(帶黄或は帶赤)で、他の部分(五〇〇乃至四〇〇μμ)は寒氣な色(帶靑)であります。故に普通の人は斯樣

なスペクトルに於て大約百六十種の色調を區別することが出來ますのに色盲者は僅かに二つしか區別することが出來ない。卽ち右二樣の色の間に於て只明さの差異を認むるに過ぎないのであります。

以上は分かり易い爲めに、純粹のスペクトルの色に就てお話したのでありますが、自然界に於きましては、色素の關係がありまして、物體より光線を反射すると吸收するとの違がありますから、主色が白と黑と混合する具合で複雜な色を生じて參ります。例へば褐色と申しますのは、黃色と灰色とが種々の度合に混じた色で、緋は靑味を含める赤色（これはスペクトルには現れません）、桔梗色は白味がかつた紫と云ふたやうな譯であります。

色盲者は、既に純粹の赤、橙、黃、綠等の色を區別することが出來ないのでありますから、從つて總て此等の色の混合色に就ても錯誤を來します、卽ち褐色などは、其の色合の明るさに由て、赤であるとか橙色であるとか、或は黃色いとか、綠だとか、灰色だとか或は薔薇色だなど丶思ふ、つまり自然界に於てはスペクトルのやうにちやんと明るさの度合が分かりませんから、凡その所で見當をつけて種々の色の名をつけますから、所謂出鱈目になるのであります。

それでは色盲者は一般に何んな風に色の名を呼ぶかと申しますと、幼少の時分から、普通の人々が、黑味がかつた薔薇、覆盆子、櫻實などを赤いと云ひ、木の葉や芝草などを綠だと云ふのを聞いて居りますが、色盲者に取つては覆盆子の色と、其の葉の色との差別は、形を別にしては甚だ僅かなるものでありまして、藥の方は多少明るく、表面に光澤がある位の違ひで、僅かに色の强さと飽和の度（物理學に於て色の飽和と云ふのは或色に白色の混ざらないことである、白色が加はればそれだけ不飽和なのである）に差異のあることを認むるに過ぎません。それ故に小兒に、只此等の差異に依て、大體赤であるとか、綠であるとか云ふ名を應用しますけれども、これは

決して普通の人の如く本統の色覺の區別に結びつけて云ふのではないのであります。即ち色盲の小兒は、斯樣にして漸次黑味を帶びた、澁味のある視感を赤と名づけ、それよりも明るみのある、温い視感を黄と云ひ、此等の感じに差別を覺えなければ、それを綠或は褐色と呼び、總て寒い色の稍や飽和した色であれば之を靑と言ひ表はすやうに覺え込むでしまふのであります。

それ故に斯樣な人間は、世間並に物に就て全く異つた色の名を用ひますけれども、其實一向その間には差別は無いのであります、何でも色の名を云ふ上には間違はない、花は紅、柳は綠と云ふ、けれども之を以て普通の人が紅と云ひ綠と云ふのと同じ感じを持つて居るものと思ふてはならぬのであります。

色盲と云ふものは、斯樣なものでありますから、當人は自ら其の不堪能なることを知らず、極めて確實に色の名を示し得るものと心得て世に交つて居るものが尠なくない、眼科醫が色盲を檢査した統計に就て見ましても、自分に視覺の障碍があることに氣付いて居る色盲者は極めて稀であります。これと云ふものは、前に述ぶる如く、色盲者は兎に角その感じを云ふて只自覺的に不十分ながら色の名を當はめることが出來、且その色覺を他人と比較することが六ケしいからであります、尚ほ一つは、色盲などゝ云へば、兎角他の所も缺けて居る片輪者の如くに考へられる嫌があるので、色に就て一度トンチンカンなことを云ふて人に嗤笑はれますと、それからは色の判斷に就て非常に氣をつけるやうになり、物を呼ぶに色で云ふことを避けるやうになると云ふ事情もあるのであります。

醫師が檢査を致しますには、色盲は容易に發見されるやうなものではありますが、精密な診斷を下しますのには、從來考へて居りましたよりは大分六ケしいのであります。と云ふのは、右に述べした種類の色盲の外に、尚ほ一つ色神異常の種類がありまして、色覺減弱とも云ふべきものであります。これは

從來至て稀なものゝやうに考へられて居つたのでありましたが、近來段々調べて見ますと、色盲者に劣らぬ程多いのであります、即ち總ての人の大約三乃至四プロセントに此の異常がある割合の統計が擧つて參りました。

（以下次號）

熱帶地方に於ける榮養

氣候の熱い處に居る人間は、寒い處に居るものよりも少量の食物を攝取しなければならぬと云ふのは一般に廣まつて居る考である。これは正當な考で、人體は能く譬に引かるゝ通り煖爐に比較すべきものとすれば、一定の溫度を保たなければならぬから、周圍の溫度が低ければ、それだけ澤山の燃料を要すると云ふ所より推して來ての議論である。

併し此考の中には誤て居る部分がある、と云ふのは、寒帶に居る人間は裸では居らぬ、それ相應に十分暖かな衣服を纏ふて居るから、實際物質消費の點に於ては熱帶乃至溫帶に居るものと更に異はない。勿論溫度の低い際には又物質の消費が增すと云ふことはある。乃はち裸體で或は不完全に著物をきて低溫度にさらされて居る時には、物質と溫度の兩替の盛に行はれると云ふことは全く間違のないことである。これが所謂體溫の化學的調節と云ふものであるが、併しこれは又筋肉の運動に由ても出來る、卽ち凍冷豫防の妙法と云はるゝ如く、努めて身體を動かすか、或は慄へると云ふやうな又不隨意的の運動に由ても行はれる。併しこれは特別な場合であつて、通常人間は適當の衣服に由つて、動物はその毛皮に由つて或は厚き皮下脂肪に由て保護されるのである。ルブチルと云ふ人の試驗に據れば、犬の毛を剃つてしまふと、その二十度の溫度に於ける消費量は三十度の時よりも五割位多いが、毛を剃らす自然のまゝなれば二十度の時も三十度の時も全く同じであつたと云ふことである。人間と化學的調節が完全に行はれて居る以上は、寒氣を覺ゆることはない。人

間に於ては又十分に衣服を重ねて烈しい温の放散を防ぎ得るのみならず、自然の皮下脂肪に由ても之を禦がれるのである。彼のエスキモー人種の皮下脂肪の厚いことは有名なものである。之に反して熱帶地方の人間の皮下脂肪は槪して少ない、これは前の場合とは反對に、可成體溫の放散を能くするやうになつて居るのである。

斯ふ考へて見ると、エスキモー人が脂肪を澤山食するのは、人の謂ふ如く食物の必要上と云はんよりは、寧ろ十分に皮下脂肪を作らんが爲に、殆ど無意識的に之を好むものと云ふ方が適當である、之に反して熱帶地方の者の格言の如くなつて居る所の節制は、可成瘦せて温の傳導を容易ならしむる爲である、即ち體溫の理學的調節で、實は汗に由て水分の蒸發を出來るだけ盛にするにあるのである。

此の原則は、種々の氣候的條件の下に置かるれば、同一人間にも當はまるが、この原則は又一定の氣候に適應した人種中の人間にも行はれるかどうかと云ふことを實驗的に調べて見るのは大に興味あることである。これには人種的の差異が大分關係することと思はれる。

近頃獨逸の生理學者のハンス、アロンと云ふ人が此の種の研究をした。

フオイトと云ふ人の調べに據れば、七十五キログラムの體重あつて、中等度の勞働をする人の必要とする食物の平均價は、大約蛋白質百二十グラムで、總體三千カロリー(熱量)と計算されたことは何人も知つて居る所である。この蛋白攝取量は最近の研究では、これよりも稍〻多くなつて居るけれども、全體の上から云へば大した關係はない。

所で體の小さな人間、例へばフイリツピンあたりの人間は其の體重の割合に物質の消費量が多い。これは小さい者は其の身體の表面が比較的に大きいからである。それでアロン氏はフイリツピン人の大人で中等度の勞働をするものゝ消費量を計算して、二割も輕いに拘らず僅かに一割位少ないに過ぎないこと

を知つた。次にアロン氏は自分の研究室の小使などに就て種々の試驗を行つて見たが、フォイト氏の定量よりは蛋白が稍々少ない、併し全體の上に就ては實際豫期した所の量迄の間に昇降があつた。此際その榮養は吾々とは異なつて、主として植物性の物で、蛋白を供給する主要のものは魚類であつた。

普通の人には餘り面白味の少ない以上の記載はドクトルカール、オッペンハイメルと云ふ人の述べた所の大要であるが、其終りに言ふて居ることが、面白い、我々日本人にも差障があり、特に暑中の榮養上一考を要する價値があると思ふたから、實は斯樣なものを西洋の雜誌より引出して紹介をした次第である。それは何う云ふ事かと云ふと、斯んなことを云ふて居るのである。

玆に尙は面白いことは、全然米食ばかりして居れば熱する、それ故に不快を覺ゆると云ふ觀察である。これはつまり十分魚を得ることが出來ず、その必要だけの蛋白を至て蛋白の少ない米ばかりで補はなければならぬ人々で、從て人體の竈に普通必要とする所よりも餘分に食はなければならぬ、この過大の改造の爲めに不快な熱感を覺ゆるのである。兎に角之に由て、榮養上の需要總額は、此の場合に於ても、身體の表面並びに勞働作業と云ふ普通の要因に關係して居るもので、氣候そのものは、別段之に本來の影響を及ぼすものでないと云ふことが確定される。

この理窟が本統とすれば、暑中は肥つて居る人よりも痩せて居る人が宜い、衣服を著て居るよりも裸の方が宜い、植物性の食物のみを食するよりも、獸肉や魚肉を食する方が暑さを凌ぎ易いと云ふことになる、これは確かに虛言では無ささうに思はれる。

耳の攝生（承前）

中耳炎を豫防するには如何したら宜いかと申しますに、唯今の所では、たゞへいかに攝生法を講じましても、世の中の衞生法がまだ十分に進まぬ間は、またかの流行性感冒、ヂフテリー、痲疹等の傳染病がなくならぬ中は、中耳炎を全くなくする事は出來ないのであります、併しこれを少くする事は攝生法を守る時は出來るだろうと信じます。

中耳炎を豫防するには、中耳炎は如何して起るかといふ事を知らなければなりません、中耳炎は或る黴菌が鼓膜の内側卽ち中耳に達して蕃殖する爲めに起る病氣であります、其の病毒卽ち黴菌は種々ありますが、其の中耳に達する途は主として一つであります、卽ち歐氏管であります。

前にも申しました通り歐氏管は中耳內の空氣の出入する途でありまして、それが耳から鼻と咽との間の所へ通つて居ります、そして平常は閉鎖されてありますが、嚔をする時、咳をする時、或は物を嚥み込む時などに開くものであります、其の開いた時に咽腔や、鼻にある病毒が耳へ這入つて中耳炎を起すのであります、それに咽腔は健康な人でも澤山の黴菌をもつて居るものでありますが、流行性感冒や、ヂフテリー等の傳染病の時には殊に澤山の黴菌が居りまして、歐氏管の中へ這入る事も度々であります。

感冒は耳病に大なる關係をもつて居ります、私共が極く表面丈けを觀察した所では、中耳炎其他の耳の病の凡そ半分以上は感冒から起るものの樣であります、それ故感冒に罹らない用心をするといふ事は、耳の病氣を豫防する第一の要件であります。

寒さが耳に及ぼす影響には直接と間接との二た通りあります、直接の影響と申しますれば、非常に溫い室で汗を出して仕事をして居たとか、或は衣服を澤山著て汗の出る樣な暖かいものを食べて居たとか、或は入浴した後汗の澤山出る樣な時に、突然戶外に出て冷たい風に吹かれる時には、身體の他の部分に

も風を引く事がありますが、屢々耳に風を引いて、鼓膜の病氣や殊に中耳炎を起すのであります、此の汗といふのもは非常に毒でありまして多くの感冒の原因となります、殊に小兒のやうに皮膚の弱いものでは、汗が冷えると直くに風を引くものでありますから、汗が出ましたなら、なるべく其の冷えぬ中に乾いた布にて拭き取る事が必用であります、また高山などに登る時に途中で非常に骨が折れて汗を澤山かいて、頂上に登りつめて冷めたい風にあたる時は、衣服についた汗が冷える爲めに風を引く事があります。

寒さが耳に及ぼす間接の影響と申しますのは、前に申しました通りの種々の場合に、鼻や、咽腔に風を引きまして、鼻加答兒、咽喉加答兒、氣管枝カタル等を起し、それから咽腔にある不潔物が、歐氏管を傳はりて中耳炎を起すやうな場合もあります、通常の中耳炎は多く斯くの如くして、起るものであります。

以上の様なわけでありますから、耳の攝生を守るには風をひかぬといふ用心が頗る必用であります、感冒は耳ばかりでなく、種々の病氣の基となるものでありますから、感冒を豫防するといふ事は、誰しも知らなければならぬ事であります、感冒の豫防に就ては玆に述べませんが、要するに寒さにあたるといふ事よりは、氣候の激變に遭ふといふ事が宜しくないのであります、例へば暖い部屋から急に戸外の寒い所へ行くやうな事であります。

既に感冒に罹つて、鼻加答兒、咽喉加答兒等に罹つた時には、其の治療を怠らず、且つ一方には其れより耳の病氣の發せぬ様に注意する事が肝心であります、單に感冒であるといふて之れを輕視してはなりません、感冒に罹つた時病毒が耳に這入るのを防ぐには咳をとめる事、嚔をなるべくさける事、及び鼻の拭き方に注意する事等であります、其中でも前の二つは自分では如何ともする事が出來ませんから醫師の手を煩はさねばなりません、併し鼻の拭き方は

注意次第で如何にもなります、中耳炎に罹つた人が鼻をかむでから耳が痛みだしたと申します事は、決して少ないものではありません。

鼻の拭き方と申しましても、そうむづかしいものではありません、唯だ鼻を拭く時にあまり力を入れぬ事と、兩方の鼻を同時に壓へぬ事が必用であります、兩方の鼻を同時に壓へて強く拭きます時は、空氣が鼻から耳へ抜けまして、耳が塞がつた樣な感じがする事があります、之れが卽ち危險なのでありまして此時空氣と一所に黴菌が耳の中にはいる時は忽ち中耳炎を起すのであります、それ故鼻をかむ時に一方のみを壓へて、他方は充分に廣くしておく事が必用であります。

また鼻がつまつて居る時にむりに鼻をかもうとする時にも、耳が塞がつたやうな感じが起る事があります、之れも前と同じ事で空氣が耳の方へ抜けたのであります。それ故風を引いて鼻がつまつて居る時にも、強く鼻をかむ事は禁物であります。なるべく醫者の治療を乞ふが宜しいのであります、併し止むを得ない時は輕く鼻をかむか、或は鼻汁が澤山出て兩方の鼻が塞つた時には、汚いやうでありますが、其の鼻汁を咽の方へ啜り込んで、口から吐き出す樣にすれば危險はありません。

傳染病と中耳炎との關係、之れは隨分複雜でありますから、唯だ要點だけを申上げませう、種々の傳染病の中耳炎を起す事の多いのは、流行性感冒、麻疹、チフテリー、猩紅熱、腸チフス等であります。就中流行性感冒は最も屢々中耳炎の原因となるものであります、卽ち鼻咽腔のカタールからして中耳炎を發するのであります。

總ての傳染病に罹らない樣に注意するといふ事は、中耳炎の豫防に必用な事であります。

此等の傳染病はまだ時として耳に起る事があります、チフテリー、インフルエンツアなどいふ傳染病の病毒が中耳にはいつて、耳のチフテリー、耳のインフルエンツアを起すのであります。

肺結核などの患者は咳嗽をする爲めに、此の痰が耳にはいつて中耳炎を起す事があります、此時に普通の膿汁をつくる黴菌が耳へはいつたのなら通常の中耳炎であります、結核菌と申します肺病の病毒がはいつたのならば結核性中耳炎を起すのであります。

結核性中耳炎と申しますのは、耳の結核でありまして、短い間に骨を破り、深く進みまして、内耳或は腦膜炎を起し、遂に生命を奪ふ事が多いものであります。此れは殊に哺乳兒に多いもので且つ哺乳兒が結核性中耳炎に罹りますると、直に甚しく衰弱致しまして、四五週間の中に死する事が少くありません、誠に恐るべき病氣であります。

大人では結核性中耳炎は、肺病に罹つて餘命幾何もない様な人に起るのが普通でありますが、子供では肺病も何もない健康な人に起る事が多く、しかも一ケ月乃至三ケ月位の間に生命を失なふものであります、之れ哺乳兒の中耳炎の恐い所以の一つであります、哺乳兒は何物によらず之れを口へ持ち行くものでありますが、此際種々の病毒が口にはいり、それが耳に達して結核性中耳炎を起すものであるとある人が申して居りますが、若し之れが眞であるならば子供の玩具は注意すべきものであります。

中耳炎の病毒は主として歐氏管からはいるものでありますが、時として外聽道よりはいる事があります、併し之れは極めて少ない事で、入浴等の際に水が耳へはいつて耳だれが起つたといふ人がありますが、之れは疑はしいのであります、前にも申しました通り、耳の孔の奥には鼓膜がありますから、之を破らなければ、水は中耳の中にはいる事が出來ません、それ故耳の孔に水がはいつた所で、中耳炎を起すものではありません、若し實際水が耳へはいつて後耳から膿汁が流れ出たとすれば、それは外聽道の病氣を起したのか、然らざれば以前に中耳炎にかかつて鼓膜に孔があいて居つたものだつたのであります、故に水浴は中耳炎の原因をなすとはいはれぬのであります、然し冷たい河の水が耳の中にはいれ

ば、鼓膜を害し、又外聴道に病氣を起すから、有害には相違ありません。

海水浴が耳に有益であるか、將た有害であるかといふ事につきましては、種々議論がありまして定まつて居りません、或は有害な事もあり、又益のある事もあり、兎に角耳の中へ海水がはいるといふ事はあまり好ましい事ではありません、鼓膜に孔があれば「みゝだれ」が起ります、鼓膜が健康であつても、鼓膜、外聴道に病氣を起します、それ故淡水でも海水でも、水浴をやる際には、水が耳の孔へはいらぬ様に綿にて栓をする事が肝要であります。(以下次號)

育兒

嬰兒の被服に就て

嬰兒の被服は、軟弱なる身體から無益に温度を奪はれるのを防ぐと云ふのが目的であります、小兒の皮膚は頗る鋭敏なものでありますから、慣れざる粗糙な布地や、不適な紐などに由て刺戟を與へ或は壓迫することは不可ません、被服は凡て緩くして、呼吸や血液の循環や運動を妨げることのないやうに致さねばなりません。又季節により、年齢によりて適當にしなければなりませんが、外觀は、幼兒に取ては殆ど關係はない、便利でさへあれば何でも構はぬことであります、温かいフランネルの被服は、自由に身動が出來ますから、寧ろ美しい面倒な仕立の著物よりも小兒の爲には宜しい譯であります、約めて申しますれば、被服は、必要なだけ暖で且つ緩やかであれば宜しいので、お飾は一切除いて然るべきものであります。兎に角小兒の皮膚に何か附加へやうと思う時には、何時でもその利害得失を熟考した上で致すべきことであります。大抵小兒は無暗に暖に包まれますが、これは育兒上普通見る所の誤で、その結果は、熱い湯を長くつかはせる時の

害よりも、もそつと有害でありまして、無告の嬰兒は可哀想にも汗をかいて、絶えず蒸氣浴の中に置かれるやうなものであります。斯様な目に逢つて居る小兒は、何時も顔面が蒼白く、皮膚や筋肉が弛むで居るものであります。且つ水分を外に出すことが高まりますから、重量は増さずして反て減り、皮膚血管は、その弛縦の爲に、寒さの刺戟に對して防衛されないから、非常に感冒に罹り易くなるものであります。

併し又他の一面に於きましては、特に散歩の際などには、その小兒に必要なだけの被服、その他の缺點の無いやうに注意することも同じく大切なことであります『この小兒は何時も冷たい手をして居りますが、何う云ふもので御座いませう』などゝ云ふこと聞かれることが屢々ありますが、これは何も別段深く詮索するまでもない『何故包でおやりなさらぬか』と答ふべきであります。小兒の身體が、その内部に於て自ら十分温を出すだけの力がないとすれば、外から、これを助けて體温を外の空氣中に出すことの少ないやうに防いでやらなければなりません。

次に、運動は食慾を振はし、消化を促がし、呼吸を良くし、從つて筋肉及び總ての臓器の爲に佳良の影響を及ぼすものであると云ふことは、先刻何人も御承知の事柄と存じます。所で普通赤坊は、哀にも脚を延ばして幾重にも纏はれ、紐などを以て縛りつけられて、全然鯣の昆布卷、キヤベチ卷乃至は乾鱈のやうな格好になつて居ります。試みにこれを解きほごして、此の昆布卷の責苦より免れしめますならば流石無心の幼兒も、小さな手足を振り動かして、何如にも嬉しげに微笑むのを見るであります。小兒には是非手足を勝手に動かし得る自由を與へなければなりません、少なくとも日に一回は、總て運動を妨害する所の衣類を悉く脱がせて、手足を自然に、自由に使用することを練習せしむる必要があります。一體自然は何うして置いたかと申しますと、母の胎内に於ては、小兒は四肢を縮めて居つたのであ

りまして、生れた後も、構はずに置けば矢張多少さう云ふ姿勢を取るものであります。是はそれで宜しいのである、身體を縮めて居りますれば、不必要な體溫の損失を防ぎ、上脚を縮めて居れば、漏らした場合にも、不潔物に浸つて居りませんから、從つて糜爛や傷を免れる效があります。故に無理に脚を眞直に延さして置かうとするのは誤つて居ります。

著物を著せる手加減は、これは銘々習れて覺えるのが一番宜しいので、前に申述べた所を心にお留めになれば、その技術の程は直ぐ會得される筈であります。只茲に最も普通に用ひられて居る衣類に就て二三の注意を述ぶれば、先づ直接皮膚につく所のオシメは、なるべく軟かなもので、出來るだけ滑かに肌について、決して刺戟したり、壓迫したりするやうなものでは宜しくない、フランネルの如き毛織物のオシメでは蒸發を妨げ且つ洗濯にも困難であります。新しい硬い布は、一度洗つて軟かにして用ひなければなりません。布の大さは大約三尺四方とし、これを三角に折つてオシメと致します。而してその上に、これよりも小さい（二尺四方位）、能く水を吸ふ布を敷きますが、大抵この上に小さい水を透さない下敷を置きます。但しこれはなるべくゴム布などでない方が宜しい。且つこゝに一つ大事なことは、この下敷の餘り大きくないことであります、やうやく半ば小兒を繞ふ位でなければなりません、さうでありませんと、濕氣が蒸散せず、溫い尿が皮膚を柔かにして創が出來易くなる虞があるからであります。それで先づ大きさは九寸乃至一尺位のものであります。外の方からくるみますのには、大凡三尺四方位の溫い襁褓にする布を用うるのであります。これを纏きますのには、なるべく緩やかに巻いて、而かも蹈みぬがれぬやうにと云ふのが要領で、頗る手際を要する所であります。簡單で善い方法は、尤も澤山襁褓をオシメにして什舞ふやうになりますけれども、三角オシメの上に直接襁褓を當てゝ、上敷の上に稍や大きな蠟引の布を廣げて寢かすことで

あります。この上を卷く所の襁褓は、能く洗濯することが出來て、臭を止めぬ性質のものでなければなりません。

西洋でも日本でも昔から赤坊を固く布で卷く習慣がありて、又これを紐や帶の如のものを以て縛りますが、これは前にも申した通り、昆布卷同樣、否これ以上の酷刑に類することであります、西洋では堅く縛れば小兒の背中を強くすると云ふやうな迷信を懷いて居るものもあるやうですが、これは反對で、何れの筋肉も從て背中の筋肉と雖、唯だ運動に依て强くなり、これを妨げ或は抑制すれば弱くなるものであります。

次には肌著と上の著物でありますが、西洋では大抵麻或はこれに類した薄い地質のもので肌著を作ります、これは比較的早く汗を吸ひ取ります、けれども同じく早く發散して、いやに冷たくなるものであります、それで衞生上の立場から申しますと感心が出來ない、それよりも氣孔の多い晒木綿で作る我邦の肌著は、小兒の肌著として最も適當なものであります。上著も毛織物よりは矢張木綿或は綿物が適當である、洗濯にも便利であり、持が善く又通氣も善いのであります。

極虛弱な哺乳兒には時として毛絲で編だ寢牀、綿物の枕の適當なこともありますけれども、これも過ぎては宜しくない、餘り暖にし過して衰弱せしむる害は甚しいものであります。尙ほ斯樣なものは、粗疎をした時に濡れぬ譯にも行かず、洗濯も六ケ敷く、消毒にも始末が惡いので、兎角黴菌の培養場となり易いものであります。それで病院などでは斯樣なものは用ひないのであります。併し毛織物を折返して、小兒の面だけを出して、うまく包む分には、そのまま外に抱て出ても差支ない、かう致しますれば、この被覆の下で運動が出來ますから、これに依て溫を保つに十分であります。小さな時分には極緩く肌につく襞の樣な被服が最も宜しい、即ち其中で小兒が思ふまゝに自由に運動することが出來、而かも四方

から温かに包まれて居りますから、襲の樣な小兒服が一番良いのであります。小兒が能く被服の中で暖かになつて居るか何うかと云ふことは時々檢査する必要がある、これには腿や足の邊を觸はつて見るのが一番早分かりであります。

背中が十分強くなりましたならば、即ち大約五箇月位にもなりましたならば、足の所まである簡單な著物を著せても宜しい、これは西洋の小兒が著て居るやうな肩から引掛けて居るものが最も適當であります、今日の日本風の小兒服は手足にからまり運動を妨げ紐を以て縛ると云ふやうな甚だ面白からぬ仕立である、これは西洋の子供服の方が遙に良い、丈けは身長の四分三と云ふのが定法であります。それから靴下、靴でありますが、これはなるべく柔かいものでないと、足が冷え又足を傷める。鞣の靴は、小兒が戸外で自由に走つて歩くやうにならなければ用ひさしてはなりません。日本襪は小兒には穿かせるに面倒で、不格好で而かも割合に暖くない、但し一層厚くして靴のやうにしてしまへば宜しい、草履は歩きにくゝ足を傷め易い、併し小さい中から靴を穿かせますと、西洋人の如く足の發育を妨げて畸形にしてしまいますから、家の内では全く跣足にして從くか、靴下にツツカケ草履を穿かせて從くが宜しからうと思ひます。

戸外では輕い小兒帽を被せますが、家の内では必ず脱がせなければなりません、家の内でも斯樣なものを以て覆ふて居れば、頭は軟かになり、且つ耳の通氣を妨げますから不可ません。

小兒が匍匐出すやうになりましたならば（七箇月）、著物は又短くして、寛い猿股を釦留にしてやります。オシメを猿股代りに致しますけれども、これは直ぐはずれて、小兒が剝出しで這ひ廻りますからいけません。

病兒看護の要領

病氣と云へば昔から申す通り一に看病であります、殊に小兒の病氣に至ては專ら看護の力に依らなければなりません、所で病兒の看護ほど責任が重く又六ケしいものはないのであります。小兒附きの看護婦としては其の生みの母ほど適當な看護婦はない譯でありますが、併し小兒の病氣に就て全く經驗のない母、少なくとも多少看護法の心得のない母は、雇ふた看護婦よりも甚しい過に陷り易い、且つ小兒が病氣となれば、何れ其母も看護婦の位置に立つ、最良の專任看護婦となる譯でありますから、茲には小兒附看護婦に對して要求する所を申述べます。

先づ看護婦としては、小兒病に就て如何なることを知らなければならぬかと申しますと、各個の病氣に就て一々その療治法を知る必要はない、寧ろ病氣になりかゝり、健康の狀態より病氣の狀態に移らうと云ふ間際を見逃さず、早く醫師に告げ、且つ醫師の來る迄の間、適當の處置を施して誤らぬと云ふことにあるのであります。

小兒に少し異常があつても醫師を招かなければならぬか、大抵の病氣は放擲て置いても自然に癒るではないかと云ふ說が出ますが、母が其の子の病氣に際して、醫師を賴まぬと云へば、それまでのことで致方も無い譯であるが、その代り之に對する母の責任は極て重くなる。又確な免狀を持てる醫師が診察せずに、怪しげな非醫者などに任かせて置いた病人を取扱ふ場合には、看護婦は能く譯を話して醫師の診察を受けしめるやうにしなければなりません。何故かと云ふに、勿論醫師の世話にならずとも治癒する病氣は幾らもあります、併し素人には之に確かな診斷を下すことは出來ません、四百四病の中には、一寸見た所では別段のことも無さそうに見えて居て、而かも速かに十分醫師の手當を受けなければ、所謂手遅れとなつて、何時までも治癒し難い痼疾となり或は死亡すると云ふ病氣も澤山あるからでありま

す。例へば身體の内の深い部分に膿を持て居る場合とか、傳染性の發疹とか云ふやうな場合には、素人には別に大した事とも思はれないのであります。非醫者などには此等の診斷のつく筈はありません。人の生命を玩具にしたとか、又傳染病などの際には、民衆の生命を危險に陷れたなどゝ云ふ恐るべき批難や責任を身に引受くることの無いやうに心掛けることが必要であります。

偖て哺乳兒に於きまして病氣が始まらうと云ふ際に第一に現はれる所の徴候は如何なるものでありませうか。これは小兒を愛することの深きだけ、又注意することの深きだけ、早く且つ確實に健康と疾病の移行きに氣付く譯でありますが、先づ最初に氣付きますことは、小兒の性質が變ることであります、即ち無頓著になりまして人が傍に參りましても、以前のやうに悦ばず、ふざけもせず、笑はさうとしてもなか／＼笑はず、反つて不機嫌に拒むか或は泣き出すやうになる。又通常の食物を好まず、既に顔貌を見ても、何處ぞ本統でない所があることが分かる、何やら疲れたやうな風で、顔色は蒼白く或は急に熱の出た時は赤くなると云ふやうなことであります。この小兒の機嫌の變り方、その様子と云ふものは頗る大切な意味のあるものでありまして、自分の預つて居る兒を愛し、眞面目に看護をするものは極些細の變化でも見逃すことはないものであります、これで以て看護婦が眞に心から其職を盡して居るか或は只器械的に仕事をして居るかと云ふことが能く分ります。

小兒の輕い衰弱(虚脱)或は少しく意識の溷濁して居ることなどは、小兒が靜かにして居る時でなければ一寸分からぬことがあるものであります。小兒は診察の際には通常興奮して盛に啼き立てるものでありますから、此等の大事な症狀は、醫師よりも看護婦の方が先に氣付く場合が多い。又多くの榮養障碍の始めに於きましては、睡眠が不穩になるものでありますが、これも醫師が精細に診察しても分からず、

反つて夜間看護をして居るものが最初に注意する場合が多いものであります。醫師の來るまでの間には、可成は體溫を取り、脈を數へて置くやうにし、最後の便のついたオシメは、醫師に示すことの出來るやうに取つて置かなければなりません。

近頃では看護人の教習には、哺乳兒の防禦的取扱が最も肝要のこととして八ケましく敎込まれます、これは尤な次第ではありますが、この原則を應用する一面に於ては、小兒よりも反て黴菌の方にのみ注意をすると云ふやうな滑稽を演せられることがあります。看護法は、先づ第一に健康の小兒と病的の小兒とを眞面目に觀察し、その觀察した所から一寸考へて、各々の場合に最も大切な事を攫れるやうに敎へられなければ進歩するものではありません。

又看護婦は、早くから其の小兒の特性を知り、これによりてその小兒の看護並に榮養上に特に必要な事柄を會得し得る位置にあるものでありまして、看護婦の觀察に依て、例へば此の小兒は神經質であると云はれる時と、全く通常であると云はれる時とでは、醫師が此の小兒の榮養其他の取扱に對する方針は全く異つて來なければならぬのであります。

（以下次號）

小供のひきつけ

子供は屢々急に危篤の狀態になりまして、家人を驚かすことがあります。通常之には二ツの場合がありまして其一つは所謂「ひきつけ」と云ふものでありまして、大人に比べますと、是は大變子供に多いものであります。例へば聲門痙攣とか、熱が高い時とか、或は單に蛔蟲などの刺戟に由つて起る事もあり其他さま〴〵の病氣に依つておこす事があります。子供が引つけますと、周圍の人は非常に驚きまして、それやこれやと、手當り次第の療法を試みますが、是は尤もの次第でありますが、其れよりも斯樣な場合には寧ろ其引つけて居る子供の狀態を觀察すると

云ふ事が餘程大事なことであります。即ち其引つけは手足や面を、ピク／＼と動かすか、或は全身が硬ばると云ふ有様であるかと云ふ事を観なければなりません。尙非常に大事なことは意識の有無、即ち氣を失つて居るか居らぬかと云ふことでありまして、是には子供の名を呼ぶとか、或は腕や足をつねつて見れば分るのであります。大概引つける場合には、眼付が變るものであります。引つけが何分位續くかと云ふことは、時計ではかつて見ることが出來ますこれと同時に顔のどちら側が引つけるか、どちらの腕、どちらの足が一緒に引つけるか、これを認めることが必要であります。往々最初に痙攣性にピクピク動いて居つたものが、終には硬ばつて仕舞ふことがあり、或はこれと反對になつて來ることもあります、そうして或る場合には引つけた後で咽喉を鳴らし、鼾をかいて非常に深かく眠ることがあります、其他大便や小便を知らずに漏らし、そうして度々子供の引つけるのを見た人でありますならば其の引つける際には、子供の瞳孔は强直を起して、反應がなくなつて居るのを、御氣付きになつた事とおもはれます。

斯の如き痙攣發作の取り扱は、家庭に於きまして先づ其の病人の怪我を防ぐことが、第一の手當であります、即ち椽側からころげ落ちるとか、寢臺から落ちるとか、又既に歯のある子供でありましたならば、手拭なりハンカチーフなりを歯の間に嚙まして、舌の尖を咬ぬやうに氣を付けねばなりません、又帶を解いて衣服をゆるめてやるとが必要であります。既に痙攣の發作が起りましてからは、別段直にこれを鎭めると云ふ手段はありませぬが、何れの引つけも一定の時間の後には自からやむものであります、且つ引つけてる内に死ぬると云ふ事は、甚だ稀なことでありまして、此點から申しましても、痙攣の發作が、何んな風に經過するかと云ふことを觀察して、よく見定める方が療治よりも必要な事であります。然し何れにしても醫者は早速招かねばなりません。

只今申したのは、子供が初めて引つけた場合でありますが、度々同じやうに引つける子供でありましたならば、かゝりつけの醫者から特別の藥を貰つて置いたならばよろしからうと思ひます。

第二に遭遇することで、家の人が自分で手當を試みなければならぬのは、虚脱と云ふ症狀の場合であります。重い病氣に罹つて居る子供に於きまして、往々急に樣子が變つて來る事があります、即ち皮膚は忽ち土色になつて、子供は甚だしく不安になり、續けさまに一本調子の聲で啼きまして、眼付は落つかず、多くは藪睨みになり、顏は紫紅色になり、鼻尖や手足は冷めたくなり、ひどく腹が膨くれて參ります（鼓腸）。總て此等は所謂虚脱の徴候でありまして、急に心臟の働が弱る爲に起る所の症狀で御座います。斯樣な場合には寸時も猶豫せず醫師を招がなければなりませんが、醫師の來る間にも、看護婦が附て居れば直ぐにカンフルを一二筒注射致しませうが、さもなければ酒類を與へ、何でも氣付け藥を含ませますが、最も簡單な方法は小兒を擔ぎ廻ることであります。而て若し出來ますならば、直ちに暫時間湯に入れまして、強く冷水を灌ぎかけるのであります。更に良いのは芥子湯に入れまして、それから小兒を寢牀に横たへましたならば、兩脇又脚の邊に湯たんぽを入れて同じやうに溫かにすることであります。

家庭衞生

氷は如何に用ふべきか

只さへ冷たかるべき水が、寒冷に逢ふて玆に氷と云ふ固形のものに變化する、これを復び水に溶かすには、餘程の熱を加へなければならぬことは、普通誰も經驗して居ることである。それで氷を人體に觸れば、その氷を溶かすだけの熱を身體から奪はれる、

その上溶けた所の水が體溫と同一になるまで熱を奪はれるから、活きて居る人間はこれに逢ふと非常に寒冷を覺ゆるのである。夏氷の珍重されるのはこの性質である、その他飲食物を冷却して置けば一定度まで黴菌の繁殖を妨げることが出來るので冷藏に應用される、醫療上に於ても種々の病症に對して此等の性質を應用するのである。

今日でこそ氷を人工的に製して食用にも供するけれども、昔は冬これを貯へて置て夏になつてこれを取出して食用にしたのである、隨分古くから知られて居ることであるが、貴いもので僅かに高貴の方々の供御になつた位のものである、仁德天皇の六十二年に額田の大中彦皇子が狩に御出になつて、偶々野中の窟に氷が貯へられてあつたのを御覽になつて、これを天皇に獻せられたと云ふことが記錄にある。後には氷室のおものと申して、冬氷を納めて置いた室より六月朔日に氷室守が氷を内裡に獻ずることになつて居つたと云ふことであるが、延喜主水司式には凡供御氷者、起四月朔日、盡九月晦日とある。

すへらきのみことの末し消せねは
けふも氷室におものたつなり　（俊頼）

德川幕府の頃には本鄕の前田樣の御邸内に氷室があつて三伏の暑中にはこれを取出して將軍に獻じたと云ふことである。

近年になつては、天然氷の採取所の常設になつて居る所だけでも二十何個所あり、その他臨時に河を區劃して採取する所や人造氷の製造所も殆ど同じ位あるけれども、それでも一般の需要を充たすことが出來なくつて、毎年北海道、長野、神奈川、栃木等の諸地方から東京に移輸入する氷の量は實に夥しいものである。

此等の氷は、何う云ふやうに用ひられるかと云ふに飲食物の冷藏に用ひられるものも元より少なくないが、大部分は碎いたり鉋削りにして食用に供せられるのである。即ち氷を食用にすることが今では一般の風習となつて居るのである。

氷を食用にすることは、衞生上から見て果して善いことであるかどうかと云ふに、餘り善いことではない。第一生水を飲むのは危險であると云ふことを知つて居れば、氷も同樣危險である。氷のやうに冷たいものゝ中には病原菌の如きも活きては居まい、或は水晶の如く透明な氷は最も清潔なものであると思ふならば、それは誤て居る、細菌類には寒冷に逢ふて死ぬるものもある、或は繁殖はしないけれども、併し氷の中でも死なぬものが幾らもある、細菌の芽胞などは氷の中でも平氣である、復び適當の溫度に逢へば結構繁殖することが出來る、尙ほ水の中に含まれて居つた種々の成分は氷つたからと云ふて變ずるものではない、隨分不潔の水でも、氷となれば全く清潔の外觀を呈するものである。尤も今日では檢査をして不良の氷は賣らぬやうにはなつて居るけれども、尠くとも水道の生水を飲む程の危險は十分ある。

單に清潔不潔、細菌の有無に就ても右に述ぶるだけの疑を懷き得るのであるが、氷を食用とするに當ては生水を飲むよりも一層危險が多い、と云ふのは、氷の如き甚しく熱を奪ふものを溫い胃の內に送つてやる時には、胃の機能に劇變を來たす、一體胃に食物を送れば、これを消化する爲に胃には血液が集つて來て、一定の時間に一定の消化液を分泌して消化の作用を營むものである、即ち消化時には胃に充血の起るのが生理の狀態である、それを反對に氷で冷すのは生理的の作用に抵抗しこれを妨害することになる、これが爲に胃は痲痹して消化液を十分分泌せず、且つ稀薄になるから、普通なれば胃液の爲に殺されて仕舞ふべき細菌も、殺されずに素通をする、消化さるべき食物も消化せずに素通をする、乃ち腸の爲には二重の危險を供へることになる譯である、氷を食べて腸加答兒を起すのは此等の事が原因となるのである。斯樣な點から、濫に氷を食することは非衞生的の骨頂と云はなければならぬ。

さて然らば醫療上には如何に氷を用うるかと云ふに

凡て毒作用は又用ひやうに依ては藥となる如く、右に述べた冰の作用は又醫療上に大效がある。

先づ第一に冰嚢であるが、これは總て急性の炎症の場合に應用して大效がある、例へば腦膜炎とか、肺炎とか、蜂窠織炎とか云ふやうな病氣の時には缺くべからざる處置の一つになつて居る、全く冰嚢の爲に生命の助かる場合も尠なくない、其他種々の場合に用ひられるが、これもその用ゆべき病症と時期とを誤れば反つて害を來すこと勿論である、又冰嚢を當てる部分に依て注意をしなければならぬ、例へば睾丸とか、眼瞼とか云ふやうな部分に冰嚢を長時間持續的に當てゝ置く時には、往々これが爲に壞疽に陷るやうなことがある、卽ちその部分が死で仕舞ふのである。

冰嚢は何う云ふ風に用うるかと云へば、冰嚢は普通ゴム或は動物の膀胱又は腸管、或は紙等で製したものである。ゴム製のものは直に冰を入れて差支ないが、膀胱や紙製のものは、乾いて縮で居る所に冰を入れやうとすれば容易に裂けるから、豫め暫時水で濕して軟かにしてから冰を入れなければならぬ。冰は大凡梅の實程の大さに碎いて入れる、餘り細かければ直き溶けてしまふし、餘り大きければ、ゴツゴツして身體に平につかぬ、且つ冰嚢が破れ易い。又餘り多く入れると重くのみなつて割合に身體に觸れる冰嚢の面が狹くなり、或は口から水が溢れ出るやうになるから、通常六分目位より多く入れてはならぬ、先づ四分目位で澤山である。

次に注意すべきことは、冰嚢を直接皮膚に當てるのは心持の惡いものである、又餘り烈しく寒冷を覺えて疼痛を感じ麻痺するやうでは宜しくないから、ガーゼなりリントなり一枚皮膚に當て、其の上から冰嚢を貼すべきである。

又昏睡に陷つて居る病人や、非常に衰弱して居る病人などは、水が垂れて耳の內に入つたり襟に傳はつたりしても、知らず又告げぬものであるから、決して水の漏らぬやうに氣を付けなければならぬ。

又腹部などには、タオールの如きものに氷嚢を包むであて緩く帶を以て止めるも宜しいが、それでも痛の烈しい時や、場合に依ては、斯の如く氷嚢の重みを懸ては不可ぬ、殊に他の壓迫を忌む場合には是非上より氷嚢を吊下げて、輕く其部に觸れて居るやうに工夫しなければならぬ、卽ち離被架に吊るか、或は天井の釘より吊下げるか、夏などは天井から絲を垂れて蚊帳を通して吊るか、又は直接蚊帳より吊下て、輕く觸れて而かも落著の宜しいやうにしなければならぬ。

氷が漸次溶けて水となれば、上の口から溢れ且つ微溫くなるから、氷を入換へなければならぬが、まだ氷の塊が少しでも殘つて居る間は冷たいから、餘分の水だけを棄てゝ宜しい。

其他氷罨法を應用する各個の場合、又其應用上の注意も種々あるが、わづらはしいから略すことゝして玆には少しく眼の冷罨法に就て述べることゝする、これは他の部分の罨法よりも少しく風が變り、又精密の注意を要し、且つ罨法の作用を顯著に認むることが出來るからである。

眼には他の部分と同じく、場合に依て溫罨法を用ゆることも冷罨法を用ゆることもあるが、冷の方には如何なる效能があるかと云ふに、冷罨法は充血を制し、これに由て灼熱等の種々の自覺的苦惱を減ずることが出來、又盛に冷却すれば、例へば次に述ぶるが如き持續的氷罨法を施せば、これに由て、風眼などの際にも、その病原物たる淋病菌や肺炎菌などの發育に不適當な溫度を作ることが出來る。但し溫罨法には又これと反對に充血を促して病氣になつて居る部分の防禦作用に都合好くする働があり、又場合に依ては溫罨法に依て始めて疼痛を輕くする效があるから、一利一害で同じ病氣でも場合に依て冷を用うることもあり又溫を用ゆることもあるから、一概に規定する譯には行かぬ、普通病人の心持の好い方に任かすことが出來る。と云ふても其の場合の如何に就ては素より一々醫師の指圖に依らなければ、眼

の如きは非常に危險で、忽ち眼明きと眼暗の差が起るから、濫用してはならぬ、玆には只冷罨法と溫罨法の作用を說明したに過ぎぬ。

扨てこの眼病には、冷罨法、特に氷罨法を用うるが宜しいと定まつた時には、豚の腸などを以て製した小さな氷嚢に細かく碎いた氷を入れて用うることもあるが、何分眼には重みを加へることを忌む場合が多いので、通常は大きな氷塊の上に、豫め硼酸水等に浸したガーゼ或はリントの、丁度眼に當てる位の大さにしたものを幾枚も載せて置いて、それを閉ぢた眼の眼瞼の上に貼し、溫まれば直ぐ冷たいものと交換するのである。此の場合その布を浸すのには第一に硼酸水、場合に依ては五千倍位の昇汞水、又極稀薄の過マンガン酸加里溶液などを用ゆるのである。

氷罨法に就ては此位にして置いて、尙は其他の醫療上に於ける氷の應用を述ぶれば、止血、卽ち出血のある場合に血を止める目的に用ゆることがある。又渴の烈しい時に、渴を慰する爲に用ゆることがあり、失神して居る時に氣付の爲に用ゆることがあり、旣に罨法の處にも述べたが、疼痛を鎭める爲に用ゆることがある。例へば胃潰瘍など丶云ふ病氣で胃から出血して血を吐く時に、小さな氷の塊を嚥ますことがある。高熱を發して衰弱し、又水をなるべく飮まぬやうにしなければならぬ所の病氣でありながら、非常に渴を訴ふる際には氷片を口に含むで、溶けたものを少しづ丶嚥下するか或は外に吐出さなければならぬ、例へば腸管の一部分が閉塞して水が血液の中に十分吸收されずして、その爲に非常に渴を覺え而かも水を飮めば益々苦痛を增す、斯樣の場合には皮下或は直接血管の中に食鹽水を注入してやるが、一方には渴を慰する爲に氷片を口に含まして、溶けたならば吐出さすのである。又日射病などに由て人事不省となつた時に氷嚢を頭に當てると同時に一方には氷水の灌腸を施せば熱を下げると同時に覺醒せしむる效がある。何れの部分でも出血する時

には其部を氷で冷せば血管が一時收縮するから止血するか、出血を弱くする效能がある、又寒冷の爲に充血が去り局部の感覺が麻痺するから疼痛を覺えなくなる即ち鎮痛の效を奏するものである。臨牀上に氷を應用する場合と其理由とは略ぼ右に述ぶるが如きものである。此に由て氷を誤用せず、適當に利用する便ともならば幸である。

震死者の手當

雷は昔から怖いもの丶隨一に數へられまして、その光、その音實に物凄いもので、激しい時には生きた空もない程恐ろしく感じます。併し彼の音は電光に縁て起る所の空氣の動搖摩擦に由て起るもので、直接この音に依て死ぬることは御座いません、但し近く落雷致します時には隨分激しく動搖しまして地上に抛げつけられたり跳飛ばされたりすることがある、即ち急劇に氣壓が變動致しますので、壓迫したり、吸引するやうな作用が起り、一種の爆發物の如き奇妙な現象が起りまして、物が倒れたり擲げられたりして、其の爲に怪我をするやうな場合がありますけれども、これは普通の怪我と別段異つた所は御座いません。

雷の音は恐しいが、本統に恐ろしいのは、彼の音よりも早く目に感ずる所の電光で御座いまして、音は寧ろ此雷光の御供で御座います。電光も實は雷の御供で、此方の雲の陽の雷と、向ふの雲の陰の雷とが合ふ時に、彼のやうな凄まじい火花を散らし、續いて彼のやうなおどろ〳〵しき聲を出すのであります。所が時々間違つて人畜に飛びついて來ることがある、これが即ち落雷、電擊と云ふものでありまして、人畜は危害を被むり或は震死を遂げることになります。併しこれは別に雷が人を殺さうと思ふた譯ではない、偶ゝ通り途に人が居るので丸木橋と誤つてこれを渡つて地球に來た迄のことであります、此の雷を法廷に引出したならば、人間の方から飛つい

て來たのであると辯護するかも知れません。何れにしても電擊は甚だ稀なことで頭の上に鳥の糞をひつかけられる位な割合かと思ひますが、本年は雷鳴が多いので、家庭衛生欄にはちと落雷の格でありますけれども、餘白を借りまして、理學の方の說明は、又別に叢談欄に讓ることゝし、此處には只雷に擊れた時には、人體には如何なる變化が起るかを概略申述べて、震死者の手當取扱をお話致すつもりで御座います。

先づ電擊に由て起る人體の變化の中で最も普通に見る所のものは火傷であります。尤も火傷と申しましても此場合は通常の火傷とは一寸樣子が變りまして、衣服は少しも燒けも焦げも致しませんのに、身體の方には案外にも廣く且つ深く、恰も第二度或は第三度の火傷に於けるが如き著しい變化を受けることがあります。これは電氣が身體を通じて地に傳はる際に弱い電氣なれば、外から分かるやうな變化は起りませんけれども、強い電流になりますと、其の一部は皮膚の下で熱となりて火傷と同じ變化を來し、一方に於ては電氣固有の分解作用を起しますので、斯樣な甚しい變化を生ずるのであります。稀には皮膚に銃創の如き孔の穿くこともあり、又皮下に線狀或は點狀の赤い溢血點を生ずることもあります。尙ほ一つ電擊に特異なるは所謂電紋と申しまして、皮膚の表面に赤い色の刺靑のやうな樹の枝のやうな模樣が現はれることでありまして、これは大抵二三日を經てば自然に色が褪めて消えるものであります。

此外電擊に依て身體の內部に種々樣々の變化が起りますが、一々申上げても餘り醫學に立入りまして面白くなくなりますから、只だ眼、耳、鼻等の五官器、及び神經系統に種々の變化が起つて、痲痺、神經炎などの症狀が起り、精神も憂鬱になつたり或は興奮したり、多少精神異常を來すことがあると云ふに止めて置きます。

雷に擊たれて死にます時には、極めて強い電流に

逢へば殆ど瞬間に影も形も無くなることがある、斯様な清淨な何の苦痛もない死方をする人は、餘程善い事をした人であらうと思はれますが、又手脚が離れるといふやうな無慘な最後を遂るとも御座います。兎に角電擊に逢ひますと卽死をするか、然らざれば全身の筋肉が一時緩み或は麻痺又は痙攣を起し、人事不省となり、呼吸も心臟の働も止むでしまひます。

玆に一つ面白いことは、雷に擊たれて死んだ人の身體を調べて見ましても、何處にも少しも異常がない、何等の痕跡も認められないことがあります。斯うなりますと果して電擊の爲に死んだものか、只驚愕して魂を飛ばしたものか何か一寸分からなくなります、けれども斯う云ふ時に段々調べて見ますと、簪、指輪、帶止の金具、煙管、ナイフ、時計及其鎖等の金屬類が一部分鎔解たり形が變つたりして居るのを見出し、鐵金具の如きは磁石の性質を帶びて居るのを發見し、之に由て確かに電死であることを知ることがあります。

電擊に由て卽時に死亡する場合は別でありますが、屋根などに落雷して、其電氣に感じて倒れたやうな場合には、大抵假死であつて、適當の手當を施せば蘇生することも多く、一時危險の症狀に陷つても數時間又は數日の後には全く恢復することが少なくありません。併し又これとは反對に、最初は別段の事がないけれども、暫く時を經て、種々の神經症狀などの現はれて來る場合も御座います。

右に申しました如く電擊は震盪性に作用する、卽ち腦、脊髓等の大事な神經中樞部を震り亂して、呼吸や循環の中樞を麻痺させますから忽ち死亡する。第二には斷裂作用、卽ち物を引裂く作用がありますので、衣服も身體もずたずたに斷裂かれることがある、此場合にも無論死亡致します。第三には火傷を起す、これは必ずしも死にませんが、常に危險である、併し此等の作用は或時には第一の作用が主たることがあり、又は第二、第三の作用が主なることが

あり、其の程度も様々でありますが、兎に角震死者に逢ひましたならば、興奮薬を與へ、心臓部を按摩し、盛に人工呼吸を施さなければなりません、殊に此場合には一寸二十分や三十分間人工呼吸を試みて蘇生しないからと云ふて諦らめる譯には參りません少なくとも五時間乃至十二時間も、確かに死亡してしまつたと云ふ證跡が現はれない間は之を續けなければなりません、死んだと思ふたものが案外に蘇生することがあります。火傷に對しては普通の火傷と同様、皮膚を破らぬやうに、脂肪を塗り、冷罨法を施し、或は適當の軟膏を塗りて繃帯を施し、尚ほ恢復した後にも力めて身神を安靜にし、久しい間微溫の全身浴を行ふて、後から餘病の發らぬやうに氣をつけることが必要であります。

甘酒の造り方

普通の酒は、今日では效よりも害の方が多い、殊に婦人の飲酒は以ての外のことでありまするが、衛生上から云ふても、風儀の上から云ふても、婦人向に至極適當な酒がある、而かも容易に手造りが出來て、小兒にも宜しい酒がある、それは實は未だ純粹の酒にならぬ前の酒、所謂甘酒と稱するものであります。實際造つて見たことのない御嬢様方の爲に、その製法を御紹介致しますから、御實驗を願ひます、但しこれも多少手加減があつて、同じやうにやりましても、多少出來不出來はあります、そこは又經驗練習の餘地があつて反つて面白い、一二度失敗して、漸く苦心の醍醐味が出來て、御家族一同に御自慢の御馳走をなさるは又一層の甘味であらうと存じます。

先づ甘酒の原料は、粳米或は糯米と麹とであります。併し糯米で造つた方が餘程甘味が強く出來ます。米と麹の割合は適宜ですが、大抵、米一升に麹一升五合乃至二升位の割合に致します。第一に普通の御飯を炊くと同様に炊きまして、或はこれよりも稍々

水を多くして炊きまして、其の出來た御飯が未ださめきらぬ中に飯櫃に移して麹を加へ、十分攪拌せます、東京邊では、擂鉢の中で擂つて混ぜますが、さうすれば粒は無くなりまして米と麹は能く合ひますから、何うしても早く出來ますけれども、矢張粒が自然に壞れて出來る方が味が善いやうであります。次に之を瓶の中に入れまして僅かばかり微温の湯を加へ、しやもじを以てよく〱攪き立てゝ粥のやうにし、紙を張りて密閉して置くのであります。斯う致しますと、瓶の中で自然に化學作用が起つて、冬ならば一週間、此頃の時節ならば二日も立てば、甘酒になるのであります。即ち麹に附いて居る麹菌の作用に依て、精しく云へば、麹菌の中に含まれて居る醱酵素の作用に由て、米の澱粉が砂糖に變つて甘味を持つて來るのであります。普通の酒は、この糖分に醸母が働いて醱酵を起し、酸となる、それを搾つて製するのであります。甘酒も餘り長く放置致しますと、所謂出來過ぎて酸味を帶びて參ります、これはつまり乳酸菌と云ふ別の黴菌が居りまして、乳酸醱酵を起して酸味を生ずるのであります。

斯樣にして甘酒が兎に角出來ましたならば、之を適度に薄め、沸かして飮用に供します、若し酸くしてしまつた時には、致し方がありませんから炭酸曹達所謂重曹を少しづゝ加へて、酸味を消さなければなりません、不注意に重曹を加へ過ぎますと又いやな味になつて、少々の酸よりは却つて飮めないものになりますから氣をつけなければなりません。

東京邊の甘酒屋が造りますのは一夜造りと申しまして、粥を煮て稍々冷えて四十度乃至五十度、即ち體温よりも少し温い位になりました時に、矢張その半分程の麹を加へまして、釜の中で擂りつぶし、よく攪拌て放置しますと、半日位で甘酒になるのであります、但しこれは本造りのやうには參りませんから少しくサッカリン或は砂糖を加へて甘味を増して賣るのであります。

甘酒は衞生上無害の滋養品で、乳の不足な小兒には

牛乳代りには出來ませんでも、之を補ふに足るものと思はれます、殊に八九ヶ月の小兒でそろ〳〵離乳をさしても宜しい頃には、甘酒は至極適當の榮養物であります。但し大人が好で飮むやうな沸騰したものなどを與へては無論害があります。沸騰した甘酒でなければ、甘酒と思はぬ人もありますが、濃厚な冷たい甘酒もなか〳〵結構なものであります。

看護法（承前）

（へ）腹部

腹に就ては、軟かいか硬いか又は張つて居るか、或は引込で居るか膨出して居るか、疼痛があるかと云ふ點に目をつける。便通が滯ほり、瓦斯が多くなれば、腹は膨隆して緊張致します、斯樣な狀態で、久しく經ちましても通じが無く、病人は烈しい疝痛を感じ、しかのみならず腹壁の外より腸の運動するのが見え或は手で觸れるやうな場合には、猶豫せず醫師を招かなければなりません、何故かと云ふに、恐るべき腸閉塞或はこれに類似の病氣に際して斯樣な症狀の起ることがあるからであります。

又痛のある部分に目を止めなければなりません、例へば右の下腹に於て、腸骨櫛の傍の部分に壓して痛があれば、所謂盲腸炎の疑があると云ふやうな譯であります。それで此の鼓腸と通便の模樣を知ることは、看護上頗る大切なことでありまして、その多いか少ないか、疼痛を伴ふか否かと云ふやうなことに注意しなければなりません。便に就ては、液狀、稀薄粥狀、濃厚粥狀、固形の便等と申します。色は通常帶黃褐色でありますが、これが綠色になり、血性になり、黑色（血液の消化されたる時、又或藥物、例へば硝蒼、鐵等の爲に）に變ずることがあります。尙ほ臭の如何にも注意し、殊に粘液、膿汁、血液、寄生蟲などの混ずる場合があります。其の他兩便が不隨意に排出されると云ふやうなことも醫師に告ぐべき個條であります。

普通見る所の寄生蟲は、小兒に於ては、彼の饂飩のやうな或は蚯蚓の様な蛔蟲と、矢張色は白いが、これよりは遙に小さく、能く動く所の蟯蟲と云ふものでありまして、これは肛門に激しい搔痒を起し、爲に小兒は夜眠らぬやうなことが屢々あります。此等の寄生蟲は、普通餘り害をなしませんが、それでも小兒には腸の障碍を來し、しかのみならず痙攣を起すことがあります。それから大人にしば／＼見ますものは、條蟲であります。これは其の名の如く眞田紐に似て居りまして、生の牛肉、豚肉、或は魚肉殊に鱒などを生で食しますと、それに由つて胃の中に這入つていくのであります。此の眞田蟲の一節一節が、糞便に交ぢて出ますが、然し又便通には關係なく、一種の匍匐運動に依つて肛門から出ることもあります。條蟲の療法は、仲々危險がありまして、色々の注意を要しますから妄りに行ふ譯には參りません。

糞便と同じく、尿の性質も重要なものでありまして、膀胱加答兒とか、膀胱結石とか云ふ場合に於けるが如く、排尿時に疼痛が有るか無いか、量が多いか少ないか、透明であるか溷濁して居るか、又膿汁、血液或は粘液などが混じて居りはせぬかと云ふことに注意を致します。熱のありますときには尿は少しく赤味を帶びて濃く見え、痛風とか腎臟結石などの際には、これを尿器に取つて見ますと、その底には赤い色の砂のやうな沈澱が出來まして、恰も煉瓦の粉のやうであります、併し又かなり大きな塊を含んで居ることもあります。

尿の出方が非常に少なくなつた場合には、これは危險の徴候と思はなければなりません、何故かと申しますと、腎臟病、心臟病などのある場合に屢々斯う云ふ事があるからであります。尤も腎臟の狀態に就いて確かなことを知るには、尿の化學的檢査に依るより外はないのでありますけれども、兎に角看護婦としては尿を見て微て分かつたことだけは醫師に告げる役目があるのでありますから、極簡單な殆ど器

械的に出來る尿の檢査法だけを一つ二つ申し添へて置きませう。

先づ尿が濁つて居ります時には、何時も濾過紙を以て漉なければなりません、卽ち四角の濾過紙を折りて漏斗の樣にしまして、之を硝子製の小さな漏斗の内に入れ、之を以て尿を漉して試驗管の中に滴します、而して大約二本指の幅程溜まりましたならば、漏斗を去つて、尿を振り動かしながら酒精燈の上で煮ます、而して之に一二滴硝酸を滴しまして溷濁が消えたならば、其尿には蛋白が無いとし、若し白い雲の樣な沈澱が起つたならば蛋白が有るので、腎臟に病氣があるものとしなければなりません。此上の精密な檢査や、糖などの檢査は、元より醫師自ら檢査を行はなければなりませんけれども、只尿の酸性は看護婦にも試驗が出來ます、卽ち靑色のラクムス紙を尿に浸して、之が赤くなれば酸性であり、若し赤色のラクムス紙が靑く變つたならば、其尿のアルカリ性であると云ふことが確であります。（以下次號）



質疑

問● （前略）私事去る五月頃より鼻汁鼻孔より出ず口中に流れ談話の際などに妨げさらるゝ事これあり、專門家の診察を受け候處貧血の爲めなりとてヨードフエラトーゼを勸められ一箇月程服用致し候に大に輕快致し談話等には差支なきやうに相成其後服用を廢し居り候處又々再發いたせし樣に御座候、身體は非常に壯健にて月經も整順（尤も少量の樣に考られ候）にて妊娠を希望致居候へ共かく貧血性にてはおぼつかなきものに候哉、猶引つゞき藥用致し居候はゞ希望は滿たさるゝものに候哉（後略）

（二十七歲女）

答● 貧血を來す病氣で同時に鼻粘膜を侵す病氣も御坐いますから、專門家の診察を御受けになつて、

處方を得、それに依て效があつたとすれば誠に結構なことで、再發したならばもう一度御相談の上、同樣の治療を試みられて宜しからうと存じます。次に壯健で月經に順調であるが、貧血性にては妊娠は六ケ敷からうかとの御尋で御座いますが、單純の貧血、殊に兎も角も壯健と云はるゝ程の狀態なれば、それが爲に妊娠せぬと云ふやうな事は御坐いません、從てヨードフエラトーゼを服用したからと云ふて妊娠することは申されません、尤もヨード劑を服して大變效のある一種の病氣で流產或は不妊の原因となる病氣も御座いますから、それならば或はヨードフエラトーゼを服用して間接に幾らか妊娠の爲めになると申すことも出來ませうが、若しそれとしたならば今日では別に遙に有效の治療法が御座いますから其れを試みなければなりません、恐らく左樣なものでは無からうと察せられます。

問● 私方小兒(昨年十一月生男)生後一二回感冒にかかり、少しく眼脂出て醫師の治療を受けたる外、別に病氣もなく略ぼ尋常に育ち來り候處、先月中旬頃少しく下利し、小兒科醫の診察治療を受け其方は五六日にて治癒致候も、それ以來顏色少し靑ざめ別に機嫌も惡からず候得共、此迄の如く育ち方目に見えず何やう元氣に乏しき樣思はれ候まゝ懇意の醫師に話し致候處、既に齒の生えたる兒(五本)に乳ばかり飮ませ置く爲めなれば粥の如きものを與へよと申され候故、左樣致候處實際宜しき樣に思はれ候も、又幾分下痢致候間、前の小兒科醫にかゝり候處、矢張り夏の間は乳だけにて、不足ならば牛乳を與へよと申され、何れの方が道理なるや不安心につき、貴會の質疑欄に於て確かなる所御教に預り度特に願上奉候也。

答● 本會の應答者は裁判官になる事は御免を蒙り度い、併しこれは實際眞面目な大切な御質問ですから、義務として一應御答は致しますが、甚だ責任の重い難問であり、且つ診察もせずに御相談致す

のですから、その御積りで御參考あらんことを希望致します。昨年の十一月生と申せば既に十ケ月の御兒さんで別に病氣も無いのに急に發育が止まつたとすれば、矢張り乳か不足か、既に齒が生えたのに少しも他の食物を與へぬと云ふことが主な原因であらうと思はれます、粥を與へよと云ふのは至極尤の意見と思ひますが、併しその爲に下痢を起せば、重湯、ソップ、葛湯又は其他の澱粉汁に代へて見る必要があらうかと思ひます、其處が專門醫家の相談を要する所でありますから、遠慮をなさらずにお掛りになつた小兒科の先生にお話になるのが最も宜しい事と存じます。離乳は其小兒に依て餘程加減をしなければなりませんから、經驗ある信ずべき專門醫の意見に從ふのが一番安全の策でありませう。



雜報

○濟生會診療規程

恩賜財團濟生會東京市診療所規程は去月十六日左の如く發表されたり。

第一條　東京市内必要の地區に診療所を置き本會治療券の交付を受けたる患者に對し外來診療及往診治療を行ふ

第二條　本會診療所の診療を受けんとする者は最寄警察署又は區役所に申出治療券の交付を受くべし

第三條　治療券一枚の治療期間は二十日とす引續き治療を要する患者に對しては診療所に於て繼續券を交付することを得

第四條　治療券の交付を受けたる患者は指定の診療所に就き醫治を受くべし但診療所に到り難き重症患者は醫師の來診治療を求むることを得

第五條　急病患者にして治療券の交付を受ける暇なき者に對しては診療所は一時の診療をなすことを得但第二條の手續きを履み治療券を提出するに非ざれば其診療を繼續することを得ず

第六條　診療所は患者に處方箋を交付し本會委託の藥劑師に就き投藥を受けしむることを得

第七條　診療所は診療簿及處方箋交付簿を備へ診療簿には醫治に關する必要の事項處方箋交付簿には處方箋交付に關する必要の事項を記載することを要す

第八條　本會委託の藥劑師は調劑錄を備へ調劑に關する必要の事項を記載することを要す

第九條　診療所は每月取扱を了りたる治療券を取纏め所定の事項を記入して翌日五日迄に之を本會に差出すことを要す

第十條　本會委託の藥劑師は每月取扱を了りたる處方箋を取纏め所定の事項を記入して調劑集計書を添へ翌月三日迄に之を診療所に送付することを要す

診療所は前項の書類を査閱し二日以內に之を本會に差出すことを要す

第十一條　治療券處方箋調劑集計書は附錄樣式に據る

第十二條　診療所診療の患者にして特に入院治療を必要とするものある時は當分の內市內に於ける適當の施設に委託することあるべし

第十三條　姙婦產婦は患者に準じ取扱ふことあるべし

○傳染病豫防心得の配付

內務省衞生局にては腸窒扶斯、赤痢及パラチフス豫防心得の小冊子を編輯印刷し、此程各府縣に配付し、一般衞生思想の喚起に資することゝなりたり、これに就き小橋衞生局長は左の如く語れりと。

本年四月警察部長會議席上に於て、衞生事業の進捗は一般國民衞生思想の普及發達に俟ざるべからず、而して如上の目的に向つては近年各地方に於て衞生展覽會等を開き其成績頗る見るべきものあり、されば尙將來廣く此等の方法を普及せしむるは勿論、地方醫師會衞生團體等を誘導して其の活動を促し、其他通俗的印刷物等を一般に配布するが如き臨機の處置に對し遺憾なからん事を希望し置けり、又傳染病の豫防竝に消毒法の肯綮を得ると否とは啻に防疫上に至大の關係なるのみならず、地方經濟上にも影響する所尠しとせず、從來の實況を見るに往々之が運用上適正を缺く場合なきにしもあらず、近來各地方に於て衞生事務諮問會等を設け是等の缺陷を補はんとするに至りたるは喜ぶべき現象なりとす、今般當局勤務の防疫官をして最も通俗的に腸「チフス」の豫防心得を編輯せしめたるを以て、之に赤痢及び「パラチフス」豫防心得を附加し、參考として各府縣に配付せんとす、各府縣に於ても之に準據し、各其地方に適したるものを作り廣く配付することならば頗る好都合なるべしと信ず、尙一般衞生に關する通俗的參考資料をも編製せんと目下計畫中なり云々

○電話度數

先頃遞信省にて東京市內の電話加入者を職業別にして電話機一臺の一日平均使用度數を調査して見たるに左の如き結果を得たりと。

職業別	使用度數	職業別	使用度數
見番	六三・五	問屋	六二・八
病院	五五・二	仲買	五一・二
會社	四七・二	運送店	四五・八
旅館	四四・七	日本料理店	四四・七
西洋料理店	四三・六	商店	四三・三
新聞通信	四三・二	倶樂部	四二・六
貸座敷	四一・七	無職	三九・七
藝妓業	三八・五	待合	三六・四
飲食店	三六・六	市場	三六・六
劇場	三五・四	銀行	三二・九
醫師	二九・四	工場	二八・一
官廳	二七・四	學校	二六・二

看護士	二三・七	住宅	一四・八

尙ほ其使用時刻は職業に依て大に相違あり、晝夜無差別に使用するは貸座敷、飮食店、藝妓屋等にして、其他の職業にては大抵午後一時より三時、四時の間に使用最も頻繁なりと云ふ。

○日本米と外國米

近頃米價が騰騰したので愈々外國米を食べなければなるまいと云ふ勢になつて來た、然し外國米は日本米に比して味の甚だ惡いことは事實で、これが爲に價は安くとも餘程餓えなければ食ふ氣にならぬのである、それでは何故に不味いのかと云ふと、先づ日本米に較べて飯にして粘氣が少ない、ぼろ〳〵する或人は蛋白質が少ないから不味いのであらうと云ふた、所が衞生試驗所で行ふた此の分析表に就て見ると外國米の方が割合に蛋白が多くなつて居る、又何故に粘氣が少ないかと云ふことは、分析の上では分らない、つまり何うして不味いかは未だよく解らないが、衞生上食して差支の無いことだけは確かである、此の不味いのも糯米と引割麥を少々混せて、火を餘り強くせず稍や氣長に炊いて、その吹出す時に汁を失はぬやうにすれば、餘程善いと云ふことである。

○餡物の中毒

昨年は牛込邊に粟餅の中毒騷があつたが、先月は府下柏木町に今川燒中毒事件が起り四十餘名の中毒者を生じ死んだものもあつた、粟餅の時には昇汞の中毒らしいと云ふ話もあつたが、確定されなかつたらしいけれども、今度の今川燒では毒藥硫酸アトロピンたることが判明した、昇汞と云ひ、アトロピンと云ひ何れも猛毒藥で、此等は誤つて入つたか故意に入れたかは知らぬが實に恐るべき事で、辛徒が過般メチール酒精で脅かされた如く、今度は甘徒はアトロピンで威かされる、縱し昇汞やアトロピンは這入らぬにしても、夏の餡物は變敗し易いから下痢などを起し易い、愼むにしかぬ。

廣告

○天機竝御機嫌奉伺

大行天皇御登遐あらせられ臣民恐懼措く所を知らず悲痛の中に在り、本會に於ては去る二日會長鍋島侯爵夫人員員千五百餘名を代表して天機竝に皇后、皇太后兩陛下の御機嫌を奉伺せられたり。

○本會總裁宮妃殿下の御大任

御大葬御當日及桃山に於ける天皇陛下御名代、皇后陛下御名代、皇太后陛下御名代は左の如く御治定相成りたる趣にて、御沙汰書の全文左の如く拜せらる。

大喪儀當日宮城より青山葬場殿迄御途中、青山御葬場御儀式終了後桃山陵所斂葬を終るまで斂葬翌日山陵祭、山陵五十日祭には天皇陛下御名代を載仁親王殿下に、桃山陵所斂葬の儀、斂葬翌日山陵祭、山陵五十日祭には皇后陛下御名代を載仁親王妃智惠子殿下に、桃山陵所斂葬の儀、斂葬翌日山陵祭、山陵五十日祭には皇太后陛下御名代を依仁親王妃周子殿下に仰付られ候儀御沙汰あらせらる

○新潟支會海水浴場開始

新潟支會に於ては例年の通り同市衞生會と聯合の上本月十七日より海水浴場を開始する由。

○本會入會者

○勅使河原君惠子紹介

●長野市榮町槇野方　通常會員　飯島綾子

○長門正清紹介

●上海有恒路三十二　通常會員　久竹代子

○新潟支會入會者

○吉村きよ子紹介

●　通常會員　山田たけ子

○中村しげ子紹介

●　通常會員　阿部さだ子

○山形支會入會者

●　通常會員　渡邊ふみ子

○改名

伊藤長子　伊藤唯子と改名

○轉居

●兵庫縣明石町上ノ丸　橋高子
●麹區土手三番町十五　藤本竹上子
●越後長岡市坂屋敷四三七　澤崎寛嗣
●英國ロンドン日本郵船會社　深野英子
●麻布區仲之町一二　田中鎌子
●芝區白金三光町四八二　高山愛子

前髪心の覇王 美人印ヘーヤロール

弊店製造の特許ヘーヤロールは原料を遠く濠洲に仰ぎ新歸朝者美容術界の明星たる岡崎エン子女史が母國への土産として持ち來りしものに大改良を加へ衞生と經濟とを兼備したる逸品なる事貴婦人界既に定評あり

ヘーヤロール前髪心壹個の目方

壹尺小	貳匁四分
壹尺貳寸大	三匁四分
壹尺五寸極大	五匁五分



ユーキリン

肺結核唯一の治療薬たる結列阿曾篤の副作用を除き然も其効果を完全にせしはスパイヤー博士發見の本劑なり

說明書郵呈

プノイミン

鈴木博士發見の本品は結核、腺病特に神經衰弱症の最良强壯劑として現時治療界を風靡する有機性燐劑なり

東京市日本橋區室町三丁目

三共合資會社

タカヂアスターゼ

高峰博士發見の本劑は効力顯著なる胃腸新薬なり

類似品あり注意

グリコナール錠

北里博士指導佐伯矩氏創製の本品は衰弱者肺病其他慢性諸症に卓効ある滋養新劑なり

說明書郵呈

東京市日本橋區室町三丁目

三共合資會社

◎新時代之要求に適合せる王冠印分娩具の提供

泰西の人は曰く其國文明の程度は砂糖の消費高に比例すと謂ふ、今分娩具（一名産ぶこん）の使用高に依り其國婦人の衞生思想の如何を測知し得べきと謂ふも敢て過言にあらざるべし、是分娩具の使用に依て分娩時に罹り易き彼恐るべき産褥熱等の傳染病を防ぎ、安全に婦人の天職を完ふせしむるを得ればなり、故に賢明なる婦人は分娩時に際し熟練親切なる産科醫及産婆の招聘と相俟て、最良なる分娩具の使用を缺せ給はざる所なりと信ず、弊店發賣の王冠印分娩具は材料を特撰し、著明なる産科醫の指導と各産婆の助言に基き多年改良に改良を加へ完全に消毒せるものなれば已に理想的の分娩具なりと、世に嘖々の好評を博せるものなれば衞生を重ぜらるゝ婦人は必ず御使用あらん事を乞ふ

定價 金壹圓五拾錢より拾五圓まで　御申越次第定價表進呈市內は御註文次第即時配達地方は小包料荷造費を申受候

御注意 各産婆諸姉の御好に依り附屬品の多少異なる事あれば御註文の際御かゝりつけの産婆に一應御相談下され候はゞ弊店の好都合に存じ候

◎粘着、發火之虞なき亞麻仁油紙の完成（見本進呈）

從來の亞麻仁油紙は粘着、發火の虞ありて永く保存に堪へず、常に醫家の不便とせらるゝ所なり、弊店此改良を企て、多年研究の結果全く是等の缺點を除ける亞麻仁油紙を完成致候間常に不便を感ぜられし醫家は一度御試用の上其眞價を知らん事を乞ふ、其他衞生材料は何品に限らず材料の精撰に重きを置き價格は最も低廉を以て御用命に應じ候間何卒御愛顧を乞ふ

日本女子大學校　櫻楓會
英和女學校　王女會
女醫學校　精研堂病院
小此木耳科病院　明々堂眼科醫院
東京至誠病院
御用

王冠印分娩具
衞生材料商
東京市小石川區茗荷谷町六十番地
阿部商店

稟告

来る九月の例會は本會規則に據り例年の通り休會致候也

暑中特に會員諸姉の健康を祈る

大正元年八月

私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌代價及廣告料

代價

一冊 定價金貳拾錢 郵税壹錢

三冊（三ヶ月分） 前金郵税共 金四拾五錢

十二冊（一ヶ年分） 前金郵税共 金壹圓八拾錢

廣告料

一頁六十二行 一行二十三字

壹頁 金五圓 半頁 金貳圓五拾錢

○特別廣告 壹頁金拾圓 半頁金五圓

○半頁以下行數ヲ以テ計算スルモノハ一行貳拾五錢

規定

○本誌講讀申込ノ節ハ前金三ヶ月分以上本會事務所宛ニ送附セラルベシ但シ見本ハ郵券ニテ貳拾壹錢代用苦シカラズ○本誌休讀ノ節ハ速カニ報知セラルベシ通知ナキ分ハ講讀者ト見做ス但シ後金ニハ割引ナシ○轉居ノ節ハ新舊宿所通知セラレタシ

大正元年八月十七日印刷

大正元年八月二十日發行

編輯者兼發行者 東京市本郷區駒込追分町二十九番地 非司秋次郎

印刷者 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 今井甚太郎

印刷所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 杏林舍

發行所 東京市麹町區富士見町二丁目三十二番地 私立大日本婦人衛生會事務所

賣捌所

東京市本郷區龍岡町 吐鳳堂

同市銀座四丁目 東海堂

同市京橋區鈴屋町 眞明堂

同市本郷區本富士町 明文館

同市同區春木町 南江堂支店

京都市寺町二條南入 若林茂一郎

東京市日本橋區呉服町 北隆館

同市神田區表神保町 東京堂

同市本郷區本富士町 盛春堂

名古屋市本町三丁目 丸善書店

九月號發行 定價

壹冊貳拾八錢郵税貳錢五厘
六冊前金郵税共壹圓七拾錢

新婦人

諒闇畫報

誠恐誠惶子々孫々に傳ふべき精巧無比の畫報

印刷紙質の精巧に於て雜誌界のレコードを破れる本誌が御大喪に闕し齋戒沐浴で謹ん印刷術のベストを發揮したる一大記念の畫報にして他に得能はざる珍貴の御寫眞を拜戴す記事又精選万世の資料たらん事を期す

コロタイプ二色摺竪一尺三寸横八寸五分特漉プローイング紙

大行天皇陛下御眞影

高貴御尊影六葉拜戴御眞筆拜戴那須岡山久留米大演習御野立五種拜戴の光榮に浴す柳原愛子の方園祥子の方皇后陛下御方乳人大河原ていの女桃山御陵行人兩刀を帶して濶歩せる二重橋大喪使總裁宮殿下以下事務官祭官人民虔禱の寫眞三十餘圖元老大官の急遽參內近衛聯隊勅語捧讀式第一艦隊弔砲發射其他御不豫御崩去に對して我六千餘萬の蒼生が發揮したる純忠の至誠以て千古の好記念としてなすべき寫眞六十餘圖は一度有るべくして再び見るを得ざる千載の精神教育第二國民の母たる婦人は必らず其家庭に一冊を具へざる可らず本誌の微意又茲に在り

電報賴信紙附

家庭日誌 九月分

溫度表晴雨表獻立表來客控●九星暦添

新婦人見本 郵券二錢 一冊

賣捌所は全國著名の書林雜誌店

發行所 東京市本郷區龍岡町八番 振替東京三〇五八番
電話下谷一六七二番 電話下谷四〇七九番
聚精堂